
幻艦記 大東亜編

山口多聞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻艦記 大東亜編

【Nコード】

N7505A

【作者名】

山口多聞

【あらすじ】

日中戦争の折、帝国海軍は蒋介石が亜米利加より購入した平甲板型駆逐艦五隻を拿捕した。この小説は、この五隻がたどる数奇な運命と、そしてそこから始まったあるはずのない歴史の流れを辿る物語。

プロローグ（前書き）

この小説は、人物の会話がほとんど出ない、伝記的な形式で書かれているので、その手の話が苦手な方にはあまりお勧めできません。また、多数の作品が下敷きになっているのもあらかじめご了承ください。

ブローグ

昭和6年（西暦1931年）の満州事変以降、緊張が高まる日中情勢を鑑み、中華民国総統蒋介石は不倶戴天の敵である日本海軍へ対抗すべく、日清戦争で起きた黄海海戦で全滅して以降整備が中断していた海軍の再興へ動き始めた。

大陸国家であるとはいえ、シナ海と黄海に広い領海を持つ中華民国にとって、海軍の整備はその防衛戦略上必要なことであつた。特に、敵が世界五大海軍国と言われる日本海軍ならば、尚更のことであつた。

彼はまず手始めに、練習艦を兼ねて亜米利加合衆国から平甲板型駆逐艦5隻を購入した。

この艦は米国が第一次大戦中に280隻近くを量産した艦で、五大湖でモスボール状態にあつたものを、格安の値段で買い込んだ物であつた。

米国から中国への譲渡にあつては、厄介払いできた米海軍が復元工事を行った上で、五大湖から大西洋・パナマ運河経由で太平洋へと回航。その後はるばる太平洋を横断して、中華民国の青島まで回航した。

平甲板駆逐艦は、既に性能の陳腐化が著しい旧式駆逐艦であつたが、蒋介石はその譲渡式典に出席するほどに、大きな期待をかけていた。

蒋介石はこの5隻を手始めに、ゆくゆくは日清戦争時の北洋水師に劣らぬ大艦隊を、少なくとも日本海軍に防衛上對抗できるだけの海軍力を整備しようと考えていた。

しかし当時の中華民国軍は空軍や陸軍の整備に予算が回され、さらに分裂した国内の統治も上手くいかず、おまけに乗員を練成するべき人材にも欠いていた。そのため海軍を効率よく動かす組織と、これらの艦艇の乗員の育成は、蒋介石の期待に反して全く進まなかった。

このころの中国海軍は、沿岸警備用の小型巡洋艦や砲艦が中心であった。その中で数少ない外洋で使える船は、第一次大戦後にドイツから購入した旧式の軽巡洋艦「珠海」だけというお粗末な状態であった。

しかもその海軍自体も、各艦艇が所属する各省が独自に動かすという、滅茶苦茶かつ非効率極まりない状況下に置かれるという最悪の状態であった。

結局5隻の駆逐艦は中華民国海軍の手でともに運用されないまま、翌年（1937年）の7月7日の盧溝橋事件による日中開戦を迎えてしまった。そして、あわれこの5隻は青島港に係留されていた所を、侵攻してきた日本陸軍に拿捕されてしまった。

しかしながら、当然日本陸軍では拿捕した5隻の扱いに困り、日本に回航するとさつさとこの5隻の駆逐艦を海軍に引き渡した。この物語はここから始まる。

プロローグ（後書き）

巡洋艦珠海 実業日本之社発行、林譲治作の特設第三水雷戦隊に登場。

中華民国海軍は、実際に空母を含む艦艇の建造を計画しましたが、しかし、予算不足で中止となっています。

改装

青島等で捕獲された中国艦艇は、簡単な修理と補給を受けると、全て曳航や自力回航によって順次当時日本が租借地としていた満州国の旅順（正確には日本の租借地）にある帝国海軍旅順工廠へ回航された。

その中で平甲板型駆逐艦は、仮想敵であるアメリカ製の艦艇と言ったこともあり、技術官による二ヶ月に及ぶ念入りの調査が行われた。

その後、順次改装のためにドックへ入った。この頃の旅順のドックは1万トン級が2基と、5千トン級1基で、後に東洋一と言われる15万トン級ドックはまだ完成していなかった。

平甲板型の処遇については、哨戒艇への改装や標的艦としての使用、または解体処分などの様々な案が出された。しかし、このころ帝国海軍は艦艇不足に悩んでいたことと、艦体の状態が淡水湖の大湖で保管されていたため比較的良好であったため、改装の上で駆逐艦として帝国海軍籍に入れることとなった。

改装の主な内容は、それまで帝国海軍が持っていなかった対空・対潜駆逐艦への改装であった。この時代、航空機の進歩は著しく、帝国海軍でもまもなく対空戦闘専用の秋月型防空駆逐艦が建造されようとしていた。

しかし前例がない艦種であるから、当然その運用マニュアルはもちろんなかった。そこで、帝国海軍ではこの5隻を暫定的に防空駆逐艦として使用し、そのマニュアルを作成してしまおうという

腹であつた。

また対潜駆逐艦としての改装は、この5隻が比較的小型であるので、駆潜艇として使えるのではないかという意見が出たのと、船団護衛任務を務めさせるのに適していると結論付けられたからであつた。

改装の要点は主砲の高角砲への換装、射撃指揮盤の対空用への変更、水雷兵装（魚雷発射管）の一部撤去、対空機銃の増設であつた。この他に、この5隻には後に試作段階の電探・逆探・水中聴音器なども率先して取り付けられることになった。

これは五隻が実験艦的色合いが濃かつたからである。しかし、これが後にこの5隻の生存性への高さとなる。加えて日本艦として識別（同型艦が100隻以上もアメリカで運用されていた）できるよう、第一・第二煙突は一つにまとめられた。

そして昭和13年4月、改装を終えた五隻は旅順総督である豊田副武海軍中將によつて、正式に帝国海軍への編入と、新たに命名された艦名をつけられた。

新たに5隻の付けられた艦名は、いずれも植物からであつた。

帝国海軍撫子級（命名基準は植物）

全長96m 排水量1200t 最大速力31ノット

乗員130名 航続力14ノットで4000海里

武装 8cm65口径高角砲4門 25mm機銃6挺 61cm
魚雷発射管4門 爆雷投射器、投下軌条各2基

同型艦「蘭」「百合」「秋桜」（コスモス）「蒲公英」（たんぽぽ）

5隻は竣工すると、旅順根拠地隊に配属された。そして第31駆逐隊を編成し、満州国海軍の「海威」（旧帝国海軍の二等駆逐艦）以下三隻とともに、長らく黄海や渤海での警備任務や、航空隊や潜水艦と共同での各種装備の試験、対空・対潜戦闘のマニユアル作成への協力作業を行った。

その後日米間の緊張高まる昭和16年9月に南遣艦隊所属となり、住み慣れた黄海を離れてシナ海へと向かった。そして、運命の日米開戦を迎えることとなる。

改装（後書き）

旅順のドッグ建設と、総督が豊田中将であるのは、学研の不沈戦艦紀伊がもとネタです。

マレー沖海戦

南遣艦隊への編入直前、「撫子」級の5隻の駆逐艦は旅順根拠地の指揮下を離れ、軽巡「久里浜」を旗艦とする第8水雷戦隊貴下の第31駆逐隊として編入された。ちなみに久里浜は、ドイツ製の元中国海軍巡洋艦「珠海」である。この船も、旅順で大改装を受けた仲間であった。

第四水雷戦隊を含む南遣艦隊は開戦時、マレー半島に上陸する陸軍部隊とその輸送船団の援護のため出撃した。

この頃、英領シンガポールには英国海軍の誇る戦艦「プリンス・オブ・ウェールズ」を旗艦とする戦艦2空母1駆逐艦5の英東洋艦隊主力部隊があり、南遣艦隊はこの艦隊の動向に注意していた。万が一この部隊が出撃すれば、旧式戦艦である「金剛」級しか持たぬ南遣艦隊は劣勢となることが、必至であったからだ。

そして12月11日、ついにマレー沖海戦が勃発した。この海戦は、主に航空戦が中心となった。まず、英海軍艦載機が仏印ソクトラン海軍航空隊基地を奇襲し、待機していた零戦隊に大打撃を与えた。

一方、やられた日本海軍側は躍起になって東洋艦隊を探し回った。そして12日午前、ついにこれを発見し、陸攻と零戦の連合約100機が北部仏印各地の基地を出撃した。

この海戦は、世界の海軍史上特筆するべきものとなった。まず、航空機が航行中の戦艦を撃沈した事である。もちろん、撃沈した相手はプリンス・オブ・ウェールズである。第二に、零戦の高性能を

見せ付けた海戦でもあった。

この海戦では、攻撃隊の護衛役である台南空、三空の零戦24機が、艦載機ならびにマレー半島の基地から出撃した60機近い英空海軍戦闘機と交戦した。

その結果、撃墜48に対して未帰還4という驚異的な記録を打ち立てた。ただし、その奮戦にもかかわらず、陸攻に多大な出血を強いた。これは後に、陸攻の防弾強化へとつながる。

さて、その一大海戦の最後に、「撫子」級は大活躍することになった。「撫子」級を中心とする第8水雷戦隊は、開戦の日は船団護衛につき、見事輸送船「淡路山丸」に殺到する敵機との交戦で同船を守りきり、逆にその対空火器をもって7機の英軍機を撃墜した。

その船団護衛任務終了後は、南遣艦隊の前衛として英艦隊搜索の任に就いていた。海戦開始後はいち早く残敵掃討のため現場海域へと向かった。

そして海戦当日の夕方、ついに英艦隊と接触した。この時の英艦隊は大破戦闘不能の巡洋戦艦「レパルス」甲板が大破した空母「インドミダブル」それらを守る駆逐艦「テネドス」と「エレクトラ」であった。

両艦隊は直に砲撃戦となった。しかし、戦闘可能艦が5対2ではお話にならず、早々に駆逐艦2隻は撃沈された。また、残る2隻も機関砲や対空砲で撃ち返したが、最終的に「レパルス」は魚雷3本を喰らい撃沈。「インドミダブル」も1本喰らって航行不能となったところを包囲され、降伏した。

こうして、マレー沖海戦は日本の大勝利で終わった。そして、捕獲された「インドミダブル」は、後に帝国海軍航空母艦「剛龍」となる。

マレー沖海戦（後書き）

駆逐戦隊の番号などは適当です。あまり言及しないで下さい。また、インドミダブル鹵獲は、角川文庫の翼に日の丸がもとネタです。

旅順帰還

マレー沖海戦終了後の12月下旬、第31駆逐隊を含む第8水雷戦隊は、南遣艦隊の所属を解かれたうえで、母港である旅順の海軍工廠へ向かって航行していた。

と言っても、ただ単に旅順へ帰還することのみが任務ではなかった。

この時、第8水雷戦隊は3隻の艦艇を護衛していた。1隻は先のマレー沖海戦で鹵獲した英空母「インドミダブル」である。しかし他の2隻は、なんと仏蘭西軍艦艇であった。

重巡「コルベール」と軽巡「ラモット・ピケ」である。この2隻は、タイ海軍との交戦を前提に、仏極東艦隊に配備されていた。しかしながら、第二次大戦の勃発とその後のフランスの降伏により本国への帰還が不可能となり、虚しくサイゴン港に停泊していたのである。

今回その2隻を日本海軍は、ヴィシー政権から買い取ったのであった。ちなみに、この2隻以外にも置いてきぼりを喰っていた水雷艇や通報艦といった小型艦艇も多数購入したが、それらはタイ海軍に供与という形で引き渡されていた。

後に、南方攻略戦では多数の連合軍艦艇が日本軍に拿捕されている。蘭印スラバヤでは、蘭軽巡「トロンプ」や米軽巡「マーブルヘッド」に駆逐艦4隻（内平甲板型3隻）が。

フィリピンのキャビテ軍港では、空襲で大破していた軽巡「ボイス」と数隻の駆逐艦、砲艦が拿捕されている。後に、「トロンプ」は「揖斐」、「マーブルヘッド」は「隅田」、「ボイス」は「綾瀬」と改名されている。また、前述の仏蘭西艦も、それぞれ「鈴鹿」と「賀茂」に改名されている。

これらはこの頃巡洋艦、特に軽巡洋艦の更新が思うように進んでいなかった帝国海軍にとって、貴重な戦力となる。

12月20日、サイゴンを出航した8水戦は、南シナ海を航行していたが、この時最前列を走っていた「撫子」の水測兵が敵潜水艦を探知、戦隊司令の江戸川新一大佐は直ちに攻撃を開始した。

この潜水艦は米軍の「サーモン」であった。同艦は数日前に、日本籍の貨物船を撃沈したばかりであった。

「サーモン」に対し、撫子は新装備の対潜迫撃砲を使用した。これは陸軍が使っている迫撃砲を、海軍技術研究所の阿笠博技術大佐が対潜用に改修した物で、射程800m、3連装で、帝国海軍初の前投型対潜兵器であった。

この新兵器を、「撫子」とその後ろから追従していた「百合」が計12発発射した。この内一発が「サーモン」の至近で爆発し同艦は損傷、浮上を余儀なくされた。そして、そこへ8cm砲の集中射撃を喰らって爆沈した。

これが、31駆逐隊初の潜水艦撃沈であった。ちなみに、この戦鬪に気を良くした軍上層部は、対潜迫撃砲の設置を奨励し、また連合国のヘッジホッグのライバルとなる対潜噴進砲を後に開発する事となる。

この後、艦隊は何事も無く旅順に入港している。そして、新任務を実行する事となる。

旅順帰還（後書き）

実際のコールベルは、仏本国に留まっていた。また、ボイスとマーブルヘッドは日本側に拿捕されていない事をここに記しておきます。

作中の江戸川大佐と阿笠大佐は名探偵コナンの登場人物のパロディです。

インド洋通商破壊戦 前編

旅順での整備を終えた平甲板型駆逐艦を中心とする31駆逐隊は、2月に新たな命令を受け、シンガポールのセレーター軍港に移動した。そこで、先発していた第8水雷戦隊旗艦の軽巡「久里浜」と合流した。

シンガポールに到着した所で、第8水雷戦隊は新たな命令を受けた。それは、インド洋とベンガル湾における通商破壊戦である。

このころ大西洋では、独海軍のUボートが第一次大戦時と同じく連合国軍相手に通商破壊戦を行っており、連合国商船と通商路に大打撃を与えていた。

当初はUボートが一方的に連合軍の輸送船団を叩いていたが、連合国もそれに対して、船団の護衛艦を増やしつつあった。当然Uボートの活動は制限され、戦果の減少を招いた。

そこで、独逸海軍は日本海軍にもインド洋を通商破壊戦を行い、英国の裏庭であるインド洋やベンガル湾を少し荒らしてもらって、護衛艦をインド洋方面へ誘引するよう要請してきた。そして、その任務に31駆逐隊は就くことになったのだ。

参加艦艇は続々とシンガポールに集まった。

この作戦に参加したのは、平甲板型駆逐艦5隻の他に特設空母「安松丸」、軽空母「大鷹」、巡洋艦「久里浜」、特設巡洋艦3隻、そして哨戒艇2隻と「睦月」型駆逐艦2隻であった。このうち、軽

空母大鷹と、駆逐艦2隻は連合艦隊からの派遣隊であった。

これらの艦艇はそれぞれが2、3隻ずつのグループを作って行動する。また、その行動予定地域もバラバラであった。

これは、今回行う通商破壊戦は狙いが広い海に散らばる敵輸送船であること、そしてセイロン島のトリンコマリーとコロンボにこもる英東洋艦隊の動きを混乱させるためであった。

このころ、英東洋艦隊はマレー沖海戦で旗艦を失い敗退したとはいえ、依然として戦艦や空母を中心とする強大な戦力を持っていた。

これらがシンガポールと言わないまでも、ビルマ沿岸やペナン等に攻撃してくる可能性はなくなかった。それを阻止し、なおかつこれらを混乱させる事は燃料の消費を強いて、士気を挫く事が出来る。作戦目的はここにあった。

しかし、敵東洋艦隊との直接対決だけは避けたい所であった。

この時期敵東洋艦隊旗艦は戦艦ウオースパイトで、この他に戦艦3、空母2を要する大艦隊であった。

もしこの艦隊が出港して攻撃してれば、それこそ通商破壊を目的とする今回のような小艦隊は、独逸海軍のビスマルクのごとく、こてんぱんにやられてしまうだろう。

そんな不安を抱えつつ、艦隊は出撃していった。

インド洋通商破壊戦 前編（後書き）

特設空母「安松丸」。宮崎駿の雑想ノートに登場。

インド洋通商破壊戦 後編

インド洋に入った31駆逐隊をはじめとする各部隊は、早速行動を起こした。まず、先行した特設空母の「安松丸」がアフリカ沖に進出し、その艦載機をもって英船団に攻撃を仕掛けた。

「安松丸」は商船改造の軽空母で、元は陸軍が空母として改装していたが、結局手に余って海軍に譲渡された船である。搭載機15機、最高速力18ノットという低性能だったがこの時は善く活躍し、商船3撃沈、空母1中破という戦果を上げた。
イラストリアス

ちなみに、「安松丸」はこの後攻撃的な任務には一度も投入されることはなく、終戦まで船団護衛や航空機輸送に使われている。

続いて、特設巡洋艦と2隻の平甲板型駆逐艦からなる部隊が独行のノルウェー船籍のタンカーを拿捕した。この船には航空用ガソリンが満載されていて、思わぬ収獲となった。しかも、船自体も新しい物であり、タンカーの不足に悩んでいた日本海軍にとって、大いに役立つ船だった。

後に、この船は給油艦「豊後」となっている。

一方、軽空母「太鷹」は駆逐艦と哨戒艇各1隻ずつを引き連れベングアル湾に突入、沿岸部飛行場への空襲を行った。

これによって、英東洋艦隊は出撃した。しかし速力の遅い戦艦中心の部隊だったため、結局日本艦隊を補足することは出来なかった。逆にインド洋に潜入していた日本の潜水艦の雷撃により、戦艦「レ

ゾリューション」を雷撃によって失うこととなった。

続いて、軽巡「久里浜」を中心とした部隊が、哨戒中の英軽巡「ベンガル」と遭遇、これを砲戦の末に撃沈した。また、特設巡洋艦3隻と駆逐艦2隻からなる部隊も、英軽巡「エンタープライズ」と遭遇、「愛国丸」が中波したが、手数で圧倒してこれを撃沈した。

この他に、輸送船を数隻ばかり撃沈したが、もともとインド洋は大西洋ほど交通量の多い海域ではないため、戦果はここで止まった。各艦隊は各々任務期間の終了のため引き上げた。

結局、この作戦の戦果は潜水艦部隊と合わせると、戦艦1、軽巡2、駆逐艦1、輸送船7撃沈。輸送船3拿捕、空母1中破と、当初の目的であつた通商破壊戦は中途半端に終わった。

ただし、ドイツ海軍が期待していた英護衛艦のインド洋への誘引は、英海軍のこの方面への護衛戦力の増強を決定したことにより成功した。

また、英東洋艦隊に対しても大きな混乱と燃料の出費を強いた。そして、この後入れ替わるようにやって来た小沢機動艦隊によって、さらに英東洋艦隊は大打撃をこうむることとなる。

同盟国海軍

戦争が始まったばかりのこのころ、はつきり言って日本のアジアにおける同盟国海軍の状況はあまりよくなかった。

この時期、日本の同盟国で海軍を持っていたのはタイ王国、中華民国南京政府、満州帝国、インドネシア臨時政府、仮自由インド政府であった。

このうち、タイ王国政府が一番有力な海軍を保有していた。タイ王国はアジアにおいて数少ない、植民地化を免れた国であった。

後にドイツ経由でフランスから戦艦を一隻購入していたし、またイタリアからタクシン級軽巡2隻を買い込んでいた。それらに加えて戦前から整備してきた海防戦艦や水雷艇、スループ、哨戒艇、潜水艦なども揃えていた。

しかし肝心の兵の練度は高いとは言えず、また購入した戦艦も第一次大戦中のものであった。そのため、この時期は専ら帝国海軍から委託された船団護衛を行っていた。

中華民国南京政府は、海軍というよりも河軍と言ったほうが正しく、保有しているのは河川用砲艦と高速艇だけであった。そのため、この時期戦局に寄与するのは不可能であった。

満州国も領海は渤海と黄海だけで狭く、保有しているのは日本から譲渡された旧式の2等駆逐艦を5隻と、漁業保護艇1隻、その他数隻の小艦艇という構成であった。

他に黒竜江にも艦隊はあった。しかしながらこちらは数こそ揃えていたが、渡用能力の無い河川艦隊であった。やはり戦局にはあまり寄与していない。

インドネシア臨時政府は、インドネシア占領部隊司令の今村中将の後ろ盾のもとに成立した政府で、占領直後から一応陸海空軍が整備されつつあった。

陸軍は主にオランダ軍の鹵獲兵器を使用していた。空軍は、日本から赤トンボを供与されてパイロットを訓練していた。

海軍はこの時期まだ大型艦はなく、日本から小型の漁船改造の哨戒艇が数隻供与されただけであった。しかもそれすらも、訓練艦としてや警備任務に使われているだけであった。

海軍の場合は艦艇を操る技術が必要不可欠だが、空軍や陸軍に比べてその人員を要請するのには時間が掛かる。少なくとも半年や1年では沿岸警備隊に毛が生えたような部隊を作るのが関の山だ。

最後に仮自由インド政府は、チャンドラ・ボースの指揮の下に成立していて、陸軍は主に元英兵中心の歩兵から成っており、それに強力であった。しかしながら、設立されて日の浅い空海軍はインドネシアと似たような状況であった。

しかし、これらの海軍は太平洋戦争後半においては、日本海軍にとって重要な伏兵となっていく。

同盟国海軍（後書き）

この話の中では、東条首相が訓練閲兵中の事故の怪我で退陣を余儀なくされており、首相が米内海軍大将に成っております。なお、欧州の同盟国は欧州編で載せる予定です。

新内閣発足と本土初空襲

昭和17年4月下旬。日本国内に激震が走った。東条首相が、陸軍を閲兵中の事故で負傷、退陣を余儀なくされたのだ。

これは一大事であった。戦時における政治の空白は国家にとって致命傷になりかねないからだ。

直ちに米内予備役海軍大將を首班とし、陸軍大臣に永田大將、参謀総長に梅津大將、海軍大臣に山本大將を置いた新内閣が発足した。

しかし、それでも2週間の空白が出た。その間を突くように米軍の本土空襲が起きた。

その日本本土に接近中であつた米機動部隊を、日本の特設監視艇「第23国東丸」が発見した。漁船改装の監視艇ゆえに武装が貧弱であつたため、最終的に同船は撃沈されたが、沈没までに4通の敵発見と位置を記した電文を打った。

しかし本土の司令部はその位置から、空襲開始は翌日と判断した。もし、このままの判断であつたなら、この時燃料不足を承知で出撃した米爆撃隊に裏をかかれたらう。ところが、運命の女神は思わぬシナリオを用意していた。

ちょうどこの時、爆撃隊の進路上に一隻の船がいた。その船は海軍の新型哨戒艇200号型の201号哨戒艇であつた。

この200号型は、広大な太平洋上での哨戒を目的に、遠洋漁船

をベースにして建造された戦時量産型哨戒艇であった。

この時期、太平洋上の哨戒は、漁船を徴用した特設監視艇が行っていたが、貧弱な武装に低速度のため、敵に見つかったらおしまいであった。また、徴発した漁船の分の水揚げ高の低下も問題であった。そこで、海軍は新規で簡易な哨戒艇を作る事となった。

200号型哨戒艇は、遠洋マグロ漁船をベースとして建造された。無論、漁船と違い戦闘を前提に設計されている。武装は25mm3連装機銃1基。127mm単装機銃2基、爆雷8個であった。

なお後期型は対潜水艦戦闘を考え、より強力な8cm高角砲を1門装備している。最高速力は16ノット。

201号はこの日初陣であった。そして、敵発見の報を受け、全速力で走っていた。その時、接近する機影を捉えた。当初乗員達は味方と思ったが、先頭を飛ぶ機体がB25であり、星マークを認めた。

既に、戦闘配置にしていたため艇長の結城学大尉は直ちに対空戦闘を下令した。それとともに、201号の機銃が一齐に発砲した。

しかし、敵編隊は半ば通り過ぎた後であった。それでも、最後尾の2機を撃墜し、1機に致命傷を負わせた。この3機は関西方面を爆撃する予定であった。ついでに言うと、残る13機も201号の通報を受けて待ち受けていた戦闘機隊により全機撃墜された。

旅順海軍工廠

帝国海軍旅順工廠が計画されたのは昭和10年の事であった。当時、日本国内の造船施設の増強がほぼ限界に近づいていたため、海軍は来たる対米戦争に備えて、新しい造船所の建設予定地を探していた。そして目に留まったのが満州国からの租借地であった旅順であった。

元ロシア太平洋艦隊の拠点であった旅順はこの当時は主に陸軍の揚陸拠点になっていたが、海軍はそこに新しい造船所の建設計画を立ち上げた。

当時、帝国海軍では51cm砲を9門持つ12万t級戦艦の建造計画があったため、それを造れる広大なドックが必要であった。旅順には日本にはないそのドックを作れるだけの土地の余裕があり、労働者の確保も見込むことが出来た。

着工開始は昭和11年4月のことであった。一応日満の合同事業とされ、建設費用の半額は満州国が出した。ただそれでも日本側の負担額は大きく、日本側は大和級戦艦3・4番艦の建造を中止せざるえなかった。

ちなみに、この年造船所や旅順配備の艦艇を指揮する旅順根拠地隊が新たに発足した。最初の司令官は豊田副武中将であった。

工廠の建設には多大な時間を要するものであるが、戦争に備えた突貫工事により、旅順工廠は昭和14年5月に完成した。その設備は15万t級ドック2基に、1万t級ドック5基という大掛かりな

ものであった。

この内15万t級ドックは、他に類を見ない超大型ドックであった。この大きさであれば、12万t級戦艦も楽々と建造できた。

ただし、戦争の足音が近づいていたため、建造に莫大な時間を食う12万t級戦艦の建造は中止になっていた。そのかわり、旅順工廠では捕獲艦の改装や改秋月型防空駆逐艦の建造が急ピッチで行われた。また、昭和15年には「金剛」級戦艦の代艦として設計された「高千穂」級戦艦の建造も開始されている。

「高千穂」級は超甲巡の拡大型で、排水量38000t、40cm砲6門、10cm高角砲20門、最高速力31ノットの高速戦艦であった。同型艦と合わせて4隻が建造された。

最終的に旅順には大掛かりな軍港設備は置けなかった。湾口が狭く、軍港として不適格とされたからだ。しかし、満州国海軍の司令部が置かれ、また日本側も先に述べた旅順根拠地隊として小艦艇を置き、近郊の飛行場には防空戦隊を配備した。

旅順は戦線から遙か後方にあつたため、終戦まで機能し、日本海軍を支え続けた。その後、昭和35年の日満条約で租借期間が短縮され、最終的に平成4年<1992年>に満州国に返還された。

旅順海軍工廠（後書き）

この話の元ネタは学研の不沈戦艦紀伊です。また、超甲巡の戦艦転用はコスミック出版の独立愚連艦隊に登場する戦艦相模級が元ネタです。

新生満州国

満州国は昭和6年に日本の関東軍が満州事変後に、ラストエンペラー溥儀を皇帝にして作られた日本の傀儡国家であった。

しかし、石原莞爾を始めとする一部の人々は満州国を真の独立国としたかった。彼らは満州に理想郷たる国家を、本気で望んでいたのである。

しかしながら、欲に駆られた政治家や軍人達は己の利権と野望にしか興味はなかった。それでは、満州国が真の独立国となれる可能性など、有り得なかった。

そんな状況が一変したのは、閏兵中の事故で東條首相が倒れた時であった。

この時新たに組閣された米内内閣の陸相であった永田大將は、前任の東條首相と違い広い視野で物を見ここの出来る軍人であった。それによって不満分子のテロを受け、今まで療養中であったがようやく軍務に復帰した。そして東条の退場によって彼とともに復帰した石原中將とともに、後の歴史を大きく変えていく事となる。

石原中將が現役に復帰し、関東軍参謀総長の職に就いたのは1942年6月であった。

彼は満州国の首都である新京の関東軍司令部に着任すると、まず支那戦線の整理に着手した。

さすがに講和は無理であったが、取りあえず、戦線整理を名目に

部隊の後退を開始した。また、人事異動も断行した。この時、樋口季一郎中将も関東軍に戻っている。

一方、彼が理想とした五族共和実現へも動き出した。企業における賃金の是正や横暴な日本人への取り締るなど、現地人と日本人の格差を埋めるために奔走した。また満州国をより独立国へ近付けるため、憲法の制定や戸籍の調査、満州国軍の拡張等を行っていた。

さて、そんな満州国は日本にとって欠く事の出来ない物資・兵器工場でもあった。大量の食料を作り出す広大な田園地帯に石炭、鉄等の資源を掘り出す巨大な鉱山。戦車やトラックを生産する自動車工場。

その中で取り分け重要だったのが奉天にあった満州航空機製造公司だ。この工場はボーイングシアトル工場並の広さと規模を誇り、日満政府に中島を始めとする航空機会社が出資して創設された工場で、後には月産機数が中島太田工場以上となる。

この工場では、日本向けの機体以外も生産していた。それが満州国空軍の主力戦闘機「飛龍」である。この機体は陸軍で没となった元キ43で、改良型を合わせて合計700機が生産された。これらの機体は、タイ空軍やインドネシア空軍でも使用された。

一方、その満州国軍も急速に増強された。昭和17年には17万だった兵力は後に40万にまで拡大されることとなる。また、関東軍が部分撤退し、日本人の横暴が減少していったため、士気も高いものとなり、後の中満戦争やソ満戦争での勝利の原動力となる。

新生満州国（後書き）

満州航空機製造公司は学研の双頭鷲の紋章が元ネタです。

この話の世界では、陸軍の南方進出の予測が早まっており、そのため長距離単座戦闘機の採用も早まり、陸軍はキ43の完成を待たず、既に生産が始まっていた零戦を陸軍使用にして採用しました。だから、開戦時に台湾からフィリピンへの空襲も行っています。

珊瑚海海戦 前編

開戦から快進撃を続ける日本軍は、昭和17年6月ついに南方資源地帯を完全に押さえ、当初の戦争目的を達成した。

しかし、連合軍との停戦交渉は未だ始まっておらず、それどころか戦線の拡大を図る派閥が軍中央を占めていた。

だが早期停戦派の米内大将や、開戦反対派であつた永田大将を中心とする新内閣は、戦線の整理を考えていた。そんな中で、裁可されたのがポートモレスビー攻略作戦、通称MO作戦であつた。

ポートモレスビーはニューギニア島の連合軍の拠点で、ここを飛び立った攻撃隊が常に日本側が占領したニューブリテン島のラバウルや、ニューギニア東岸のラエを始めとする拠点を脅かしていた。

もしポートモレスビーを攻略すれば、日本は目の上のたんこぶを除去するだけでなく、米豪遮断を進められるメリットがあつた。また、援奨ルートの一つを遮断することもできるという、一石三鳥な効果が期待できた。

昭和17年5月、作戦は発動され各艦隊はトラックやラバウルを出撃した。

艦隊は3つに別れ、一つは米・豪艦隊出撃に備えてトラックを出撃した、攻略部隊を支援する角田少将指揮の機動艦隊。第5航空戦隊の「瑞鶴」、「翔鶴」に第一航空戦隊から分派された加賀が加えられていた。

2つ目の部隊である梶岡少将指揮の攻略部隊は、後述する護衛部隊と共にラバウルを出撃した。上陸支援の重巡「青葉」、「衣笠」、「加古」、「古鷹」の4隻に、軽巡3、旧式駆逐艦「睦月」型8隻から編成されていた。

3つ目の部隊は、榊原少将指揮の護衛部隊で、輸送船団護衛の空母「瑞鳳」、「祥鳳」、軽巡「八十島」、「五百島」と平甲板型駆逐艦8隻からなる部隊であった。

榊原少将は角田少将と同期であり、今回唯一の海上護衛艦隊よりの参加であった。性格は温和で、角田少将のような闘志は持ち合わせていなかったが、護衛部隊の指揮官らしいその忍耐強さには定評があった。

軽巡「八十島」、「五百島」の2隻は元中国海軍巡洋艦で、改装と乗員の習熟が終わって今回が初出撃の艦であった。

空母「瑞鳳」は連合艦隊所属の艦のため、今回参加の予定は当初なかったが、榊原少将が「祥鳳」の練度不足と航空戦力の不足を理由に挙げて出撃を要請し、今回臨時に編成に組み込まれた船であった。

一方、迎え撃つ米軍も日本の暗号を解読してこれらの部隊が動くのを見越して空母「レキシントン」、「ヨークタウン」を中心とする機動部隊を送った。さらに、米豪連合の巡洋艦隊も出撃させた。

今、珊瑚海にて決戦が起ころうとしていた。

珊瑚海海戦 前編（後書き）

軽巡八十島級・・・元中国海軍ニンハイ級。旅順海軍工廠で大改装。船体の延長や武装の交換を行った。

速力25ノット、武装12.7cm高角砲8門、25mm機銃12挺

海上護衛艦隊・・・開戦当初に陸軍輸送船や海軍艦艇が米潜水艦の攻撃による被害を受けたので創設された。

御意見・御感想お待ちしております。

珊瑚海海戦 中編

1942年5月7日、珊瑚海海戦一日目。

この日、朝から日米両機動部隊は厳戒態勢にあった。それぞれ敵機動部隊出動の可能性ありという報告を受け出撃したからである。しかし、この海戦は初っ端から波乱の嵐であった。

まず、米側の機動部隊が偵察機が発見したMO攻略部隊を主力機動部隊と誤認して攻撃した。

幸い、この攻撃によって攻撃を受けた空母「祥鳳」と「瑞鳳」は撃沈されなかったが、「祥鳳」は右舷に魚雷一本と飛行甲板に爆弾一発を喰らい、航空機の離発着艦が不可能になってしまった。ただ、沈没にいたるほどの打撃を受けることはなかった。

これは米軍が後方にいた陸軍輸送船を空母と見間違え、攻撃隊を分散したのが原因だった。ちなみに、この陸軍輸送船は周囲にいた対空兵装が強力な「撫子」級駆逐艦が有効な対空射撃を行ったため、被害はなかった。

ちなみに、この時陸軍輸送船には零戦10機が搭載されていた。なぜ海軍機が陸軍の船に乗っているのか？

これはこの数ヶ月前、海軍と陸軍はある協議を行ったことによる。それは南方における陸軍徴用船の被害についてであった。

実は、南方作戦の最中、陸軍の強襲揚陸艦「神州丸」が海軍の魚

雷が命中し大破着底してしまった。海軍としてはたかが輸送船一隻の被害としてしか受け止めていなかったが、陸軍の怒りはすさまじかった。

「海軍は護衛の役目を請け負っておきながら、海戦に夢中になったあげく我々の輸送船が味方の魚雷で沈められるとは何事か！！なにが無敵連合艦隊だ！海軍は信用できん。我々は独自に護衛の艦隊を作る！」

と言い出したのだ。確かに海軍にはたかが輸送船1隻だが、陸軍にとつては精鋭の一個連隊が消えてしまうかもしれない切実な問題なのだ。

だが、だからといって陸軍が独自に艦隊を作るなど言語道断である。海軍の沽券に関わる問題である。しかし、既に陸軍は空母＜強襲揚陸艦＞の建造を開始し、輸送用の潜水艦さえ計画していた。陸軍としても引く気はなかった。

長時間の議論の末、結局海軍が護衛専門の艦隊を作る事とした。それが海上護衛艦隊である。この時、陸軍空母も運営は海軍に移管されている。艦載機等は海軍でしか用意できなかったからだ。後に、この陸軍空母を含む護衛艦隊は商船の護衛も行っている。

話はそれだが、結局米軍は30機近い喪失を出して、この日は他に行動しなかった。

一方、日本側はというとまず翔鶴の偵察機が「空母1、巡洋艦1見ユ。」と打ってきた。しかし、角田少将はこの報告に疑問を持った。

「敵機動部隊がたった2隻だけであるはずがあるまい。」

案の定すぐに偵察機から「敵空母は油送船の誤りなり。」と訂正電が来た。

その後も誤報が相次ぎ、結局この日攻撃隊はラバウルの航空隊が発見した巡洋艦部隊を攻撃し、巡洋艦1、駆逐艦1を撃沈し、航空機5機を喪失ただけであった。

こうして、1日目は終わった。

珊瑚海海戦 中編（後書き）

感想・御意見待っています。

神州丸の海軍の魚雷による大破は実際にあつたことです。

珊瑚海海戦 機動部隊戦闘編

珊瑚海海戦2日目、この日角田中將は偵察機を増やして、米機動部隊の発見に努めた。そして、偵察機発艦2時間後、ついに空母ヨークタウン・レキシントンからなる有力な米艦隊を発見した。直ちに攻撃隊が発進した。高橋少佐に率いられた艦戦36、艦爆30、艦攻27の計93機であった。

一方、米機動部隊の偵察機もそれに遅れること40分後に日本艦隊を発見、こちらも艦戦21、艦爆32、艦攻15の計68機を発艦させた。

先に日本攻撃隊が攻撃を開始した。ただし、この時日本側の攻撃隊は角田中將から訓示でこういわれていた。

「いいか、空母は甲板に2、3発ぶち込めばそれで役立たずになる。だからまずは飛行甲板をダメにする事だけ考えろ。そうすれば後からどうとでもなる。また、米艦隊は輪陣形を採用しているので、対空砲火に注意せよ」

つまり、無理して沈めることは考えるなという事であった。闘将ではあったが、角田中將は航空への造詣もあり、このような合理的な判断を出来たようだ。また、対空砲火への注意も、よく情報を勉強した結果といえよう。

ちなみに艦隊陣形の研究は、同じく機動部隊の使い手として定評があった小沢提督や山口提督も研究したという。

しかしながら、米国側も黙って見ていたわけではない。米軍は新

兵器レーダーで待ち伏せしていた。また戦闘機隊も2対1で戦う口ツテ戦法を使い、零戦に対抗しようとした。

この作戦は図に当たり、米戦闘機隊隊長のサッチ少佐は見事零戦を撃墜している。

しかしながら、この時米側の直援隊は零戦隊と正面からぶつかってしまった。まだ搭乗員の多くがロツテ戦法に不慣れであり、また日本側の戦闘機隊の練度も高かったため、攻撃隊の完全阻止には失敗した。

そして戦闘機の網を逃れた艦爆と艦攻が2隻の空母目掛けて襲い掛かった。

米海軍の対空砲火はすさまじく、艦爆9、艦攻7が犠牲になった。それでも攻撃隊の奮戦により2隻の空母はいずれも離発着艦不能となり、また駆逐艦1も撃沈した。加えてその他3隻を撃破した。

一方、米攻撃隊は機数不足と練度不足から徹底差を欠き、空母「加賀」に2発の爆弾を命中させ、同艦を中破させるに留まった。

ただし、この時角田中将はスコールに入るために一時的に反転した。これを見た米軍機はこれを日本艦隊撤退と判断した。しかし、日本艦隊は米軍の攻撃が終了後、再びポートモレスビーへ向かい進撃していた。一方米機動艦隊は損傷甚大のため、一番近い港で工作艦のいるポートモレスビーへの入港を目指した。

珊瑚海海戦 占領編

損傷した米機動艦隊は、一路陸上航空隊の支援を受けられるポートモレスビーへと向かって航行していた。そして米機動部隊がモレスビー入港予定2時間前に、それは起きた。

米艦隊はこの時、既にレーダーを導入していたが、昼間の海戦で搭載艦艇は軒並み損傷を受け使用不能に陥り、この時は見張り員の目だけが頼りであった。しかし疲労困憊状態にあった彼らは気づかなかった。日本艦隊が接近している事に。

実は、米軍は偵察機が発見した日本機動艦隊の一時的反転を、日本側のモレスビー攻略中止と判断したが、実際は攻略部隊も機動部隊も隊列を組み直して、モレスビーへ向かっていたのだ。

この時、米機動部隊に接触したのは攻略部隊の方であった。

闇の中で米機動部隊を発見した日本艦隊は、当初相手は角田機動部隊と思った。しかしながら「レキシントン」の特徴的な煙突を認め、自らが米機動部隊と接敵したと判断した。

そして、間髪を置かずにまずお得意の魚雷攻撃をかけた。

かなりの遠距離からの雷撃であったが、帝国海軍が誇る酸素魚雷は期待に答えてくれた。

魚雷攻撃の結果は、発射した40本中8本が命中した。魚雷が命中した軽巡1、駆逐艦1が瞬く間に轟沈し、空母「ヨークタウン」にも4本が突き刺さり、後沈没した。この時になって、米側も日本

艦隊を確認し、反撃に出た。

距離が近かったため、この後はもう完全に乱戦になってしまった。しかし、多くの損傷艦艇を抱える米艦隊は有効な反撃策が出来なかった。

そのため、多数の砲弾を被弾した「レキシントン」は航行不能にされ、接舷した日本駆逐艦により拿捕され、その他の艦艇も多くが沈んだ。なんとか1隻がモレスビーへ逃げ込み、2隻がオーストラリアに逃走した。しかし、彼らも意地を見せ、日本側の駆逐艦「菊月」を沈め、重巡「加古」を大破（後回航途中に米潜水艦「S44」の雷撃で沈没）させたのは天晴れと言えた。

翌朝、角田機動艦隊が合流し、日本側はポートモレスビー攻略にかかった。この時連合軍側にとって不幸だったのは、前日の日本艦隊撤退の報を受け、臨戦態勢を解いてしまっていたことであった。結果、易々と上陸を許し、また飛行場や軍港の早期占領を許してしまった。

モレスビーは僅か3日で陥落し、日本側は多大な量の航空機や物資、さらに海上と港内で合わせて30隻近い艦艇を拿捕する事に成功した。こうして、米豪遮断作戦は大きく前へと進められる事となる。

しかし、日本側も喜んでばかりはいられなかった。この海戦で、日本側の対空火器や射撃指揮装置の遅れと航空機、とくに艦攻と艦爆の防弾性能の遅れが表面化した。また、米機動艦隊の出現は帝国海軍の暗号が解読されたのをあらわしていた。

珊瑚海海戦 占領編（後書き）

重巡加古は実際に米潜水艦S44に撃沈されています。

日本軍補給事情 前編

昭和12年に始まった日中戦争。そのさなかに起きた南京事件（南京での虐殺と前後する日本軍の国際法違反の行為の総称）は、日本の歴史上計り知れない汚点であった。これが起きてしまった理由には諸説ある。

兵の士気不足、上官の監督怠慢、戦友を殺された事への復讐心から来る兵士の規律の荒廃等があげられるが、その中でも特に注目すべきは陸軍の補給能力の欠如であった。

日清戦争以来、日本陸軍は補給を全く無視していたとは言えないまでも、軽視していた。

海軍ならば、軍艦という大量の燃料で動くデリケートな武器と常に過ごす上で、補給の重要性はある程度わかっていた。

しかし、陸軍は日清戦争以来の現地における自活という悪習（主に食料）をこの時点においても払拭できなかったのだ。そしてそれが略奪、ひいては民衆の大量虐殺という事態に至ってしまった。

本当なら、この事は虐殺と共に、闇から闇へ葬られる所であった。しかし、運命はどこで変わるかわからない。

南京事件発生時、南京には未だ留まっている外国人も多くいた。そして、事件が起きたのは南京占領翌日であった。

なんと、日本側の誤射でアメリカ人記者が死亡する事態が起きたのだ。しかも、悪い事にその時アメリカ人貴社は団体で行動してい

たため、彼を含めて死者5人、負傷者6人という数になってしまった。

この事態に、これまでに砲艦への誤爆や、大使館すれすれの爆撃など、少くない被害を負っていたアメリカはついに切れた。

中国日本大使館へ赴いた在中米国駐在員、東京の駐日米国大使がそれぞれこの事態に対する謝罪と賠償を日本政府に求めた。

さらに、英、仏もこのアメリカの行動を支持した。そして、この時この三国は揃って中国での日本軍の国際法違反の行動を非難する声明をも公式に発表した。さらに、日本の新聞社へも声明を送りつけた。しかも、送りつけたのは記事締め切りギリギリの時間で、大使が声明を手渡すよりも前であつた。

これに気づいた日本側はただちに特高を使つての新聞の発行差し押さえをはかったが、既に相当量が出回つた後であつた。（後に、一部の政治家が差し押さえの運動に対して妨害を図つたとしたとされている。）

この時に至り、国民は一部ではあつたが、軍が中国で犯した罪を知るようになった。ただ、一部の国民が知つたところで、軍への批判はそうそう起きない時代であつた。し

かし、それが国中となると話は別である。そしてもっとも大きかつたのは昭和天皇の耳に入つたことだつた。昭和天皇はすぐに軍の重臣を呼びつけると、事実確認を行つたのであつた。

日本軍補給事情 前編（後書き）

参考文献 南京事件 岩波書店

日本軍補給事情 後編

南京事件に対し、昭和天皇は厳しく軍首脳を追及した。当初軍部は返答をごまかしていたが、しかし欧米の新聞が写真付きの記事を出してしまい、それが巡り巡って日本国内でも出回ると、もはや隠しようのないものになってしまった。

結局、その後陸軍は中国戦線において一部兵士の蛮行を認めざるを得なかった。また、海軍も爆撃の際に起きた民間施設などへの誤爆を認めた。

それでもその過程において殺された一般市民の数は五千人とかなり控えめに発表された。しかし、それでも数に関係なく、皇軍が蛮行に及んでいた事実は国内に大きなショックをもたらした。特にそれまで郡のやることは正しいと信じていた一般国民に与えた衝撃は並大抵ものではなかった。

各地で軍上層部を批判する声が上がった。

「軍は陛下から陛下の赤子たる兵を預けられているにも関わらず、このような蛮行を許したのは国の恥である！！」

「真実を隠し、国民や陛下を欺こうとした軍首脳は即刻辞職すべし！！」

「辞職では手ぬるい！腹を切るべし！」

このような論調が飛び交い、結局時の陸軍大臣は辞職を強制され

た。

さらに、昭和天皇は事件に関わった全ての師団の師団長や支那派遣軍の司令部、本土の参謀本部の責任をも追及した。

結果派遣軍の司令官であつた松井中将や参謀本部の武藤大佐ら、多数の高級将校が予備役編入となつた。その他にも減給や訓告処分者が相当数出た。

また、事件再発防止のための研究委員会も陸海軍内に作られた。

研究委員会は事件の原因を多数発表したが、この中で特に（天皇の）注目を集めたのが、補給の問題であつた。この結果、帝国陸軍では輜重連隊の大幅な強化が決定された。トラックや牽引車両の増強や携帯食料の開発等がそれである。これらは、それまでの軍の根本を変える物であつた。

輜重、つまり補給部隊の扱いは軍の内部では極端に低いものであつた。それを象徴する歌まであつたほどだ。その輜重部隊の扱い格上げは戦闘部隊の兵の自尊心を傷つける物であつた。しかし、陛下からの勅命とあつては、兵士達も受け入れざる得なかつた。

また、民生面へも影響を残した。これによつて食料の増産が叫ばれ、農村では新種の農作物や肥料の開発が促進され、一部では初歩的ながら機械化も行われた。これによつて、生産能力は大きく向上した。

後の太平洋戦争において、日本が曲がりなりにもアメリカとの停戦に持ち込めるほど戦えたのは、この時の補給体制の改善に他ならないと言えた。

セイロン侵攻

昭和17年6月、米太平洋艦隊は日本側の暗号を解読し、次の日本艦隊の目標がミッドウエーであることを突き止めた。また、それに平行してアリューシャンへの陽動攻撃を行うことも見抜いた。

そこで、米海軍はただちに空母3隻を中心とする機動部隊を日本艦隊の迎撃に向かわせた。

6月4日、情報どおり、日本の攻撃隊がアリューシャン列島のダツチハーバーを襲った。日本側は約60機規模の攻撃隊が一回の空襲を行った。

その結果、港内に停泊していた貨物船1、潜水艦1が沈没。被撃墜と地上で破壊された航空機の損害30であった。対し、日本側の未帰還は9機であった。

ちなみに、この時危つく1機の零戦が敵地に不時着しそうになったが、幸い海上まで飛行し、待機していた潜水艦のそばに着水できた。

そして、ミッドウエー沖に進出した米機動部隊は日本艦隊を待ち構えた。

しかし、待てど暮らせど日本艦隊はやってこなかった。そして5日になって、驚愕の報告が彼らの元にもたらせた。それは、日本機動艦隊が遠くインド洋のセイロン島に再空襲を行いそして上陸占領したという報告であった。

珊瑚海海戦後、日本は次期侵攻作戦をミッドウエーにするか、インド方面にするかで紛糾した。しかし連合艦隊に既に山本五十六は無く、結局占領後の補給等を考慮し、セイロン島への侵攻が決定した。ちなみに、作戦の成功率を高くするため、小規模な機動部隊によるアリューシャンへの陽動攻撃も決定した。

セイロン島は、現スリランカのことで、この当時は英国の占領地であり、シンガポール陥落後は英東洋艦隊の拠点であった。また、もしこの島を占領すれば、援蒋ルートに完全撃滅が可能であった。

1942年6月時点で、既に英東洋艦隊はそのほとんどの艦艇を戦没するか、地中海に引き抜かれるかで失っており、残っているのは旧式の巡洋艦や駆逐艦にスloopだけであった。また、セイロンの航空戦力も60機のハリケーンを除けば後は旧式機ばかりであった。また、陸上戦力も相次ぐ引き抜きで、最低限度の戦力しか残っていなかった。

そこへ、空母9、戦艦6を中心とする艦隊に援護された帝国陸軍海上機動旅団が、空襲後に上陸したのだ。勝てる筈が無かった。

結局、トリンコマリーの魚雷艇隊が奮戦し、駆逐艦1を沈めたのが英軍があげた唯一の戦果らしい物で、セイロン島は1日で陥落した。

この戦いにおいて初陣を飾ったのが、前述した海上機動旅団であるが、それはいかなる物かは、次話において語らせていただく。

セイロン侵攻（後書き）

セイロン侵攻は、実業之日本社刊の覇道の海戦が元ネタです。

上陸支援艦隊

1942年3月に海軍は陸軍の要請に従い、陸軍輸送船団の護衛、上陸支援専門の艦隊の編成に着手した。

研究段階において、この艦隊には上陸支援時に火力支援が行える戦艦、巡洋艦。そしてエアカバーが敷ける空母。そして航海時に対潜・対空護衛可能な駆逐艦が必要とされた。

戦艦の候補は直ぐに決まった。「山城」級の2隻である。

この時期、帝国海軍においては機動部隊直援用の「金剛」級戦艦しか稼動している戦艦は無く、その他の艦は、真珠湾攻撃によつて仮想敵が全滅したため、遊んでいる状態だった。そこで、この内旧式に属する「伊勢」ならびに「山城」級の改装が決定した。

この内、足の速いほうであった「伊勢」級は2隻とも、高速化の上で全通甲板を持った空母への改装が決定し、17年4月から本格的な改装工事に着手した。

一方、「山城」級は空母ではなく、この上陸支援艦隊用の戦艦への改装が決定した。

改装内容は、まずこれまで爆風が問題となっていた3番砲塔を撤去し、代わりに無線と試験段階の電探設備、そして水上機2機のプラットホームにするものであった。加えて副砲塔も半分に減らし、その代わりに12.7cm連装高角砲4基を増設し、そして40mm連装機関砲も4基増設された。

当初、事実上陸軍の犬になるこの任務に就く事に、多くの乗員が反対した。しかし、上官がもしかしたら艦隊戦も行えるかもしれないという言葉になだめられた。

巡洋艦は、重巡の「鈴鹿」、軽巡の「賀茂」が編入された。これらはいずれも以前購入した元仏蘭西艦である。ちなみに後に増強された艦も、全て拿捕艦となる。

駆逐艦は旧式の「睦月」級が改装された上で8隻集められた。これらは、いずれも魚雷発射管を半減させ、主砲を両用砲に載せ代えていた。

空母は海軍からは出さず、陸軍から出される事となった。これは、以前より陸軍が建造していた「あきつ丸」級で、いずれも兵員輸送設備を大きく削減した。それによって出たスペースと重量を、搭載機とエレベーターの増設に活かした。

ちなみに、これらの代わりに専門の強襲揚陸艦の建造が急がれた。これが後の二等輸送艦である。

艦隊の改装が突貫で進められ、工事はいずれも5月までに完了した。そして、艦隊はそこで演習を始める筈であったが、その前にセイロン島攻略作戦への参加が命じられ、ぶつつけ本番で出撃した。幸い、この作戦は大成功に終わった。

そして、これ以後セイロン島は欧州への中継拠点として活用されるようになる。

上陸支援艦隊（後書き）

次回は、陸軍海上機動旅団に焦点を当てます。乞うご期待。
御意見、御感想お待ちしております。

海上機動旅団 上

昭和15年、国際情勢の急速な新手に伴って日本の南方への進出が現実化すると、陸軍は大きな戦略変更を行わなければならなかった。これまで整備されてきた日本陸軍の装備の一切が対ソ戦用に設計されていたからだ。

これは日本陸軍が、明治以来北方のソ連を仮想敵としていたことによる。しかしながら、今後陸軍が採るべき戦略は、全く逆の南方への進出であった。

そんな中、陸軍が問題視したのは敵前上陸であった。これが今までであつたら河川ですんでいた。しかし、対米戦で考えられるのは島嶼戦である。そこで、新たな装備が必用となった。

陸軍が必用としたのは、敵地までの長距離を重装備を輸送可能な輸送艦。上陸時の航空支援を行う空母であつた。

この内、輸送艦は「摩耶山丸」等の現代の強襲揚陸艦とも言える船が建造された。加えて、空母はこの摩耶山丸の船体に飛行甲板を敷いた船が計画された。しかし、この船は設計段階で設計技師から疑問の声が出た。

「性能が中途半端にならないか？」

これは、以前に建造された「神州丸」にも言えた事であつた。この時は陸軍が妥協し、「神州丸」から航空装備を撤去して上陸強襲任務専用艦とした。

今回の場合は搭載機を回天翼機と、小型観測機とすることで妥協するはずであった。しかし、この二つの機種の採用が大幅に遅れており、戦力化できるか微妙となっていた。

そんな中、昭和17年初頭の海軍との協議により、海軍の上陸支援艦隊の創設の見返りとして、これら飛行甲板装備船の海軍への委託運用が決まり、最終的に軽空母として竣工した。

こうして空母の方は解決したが、もう一方の輸送艦についての問題が残った。

この頃、陸軍ではSS艇という浜辺に乗り上げる、言わば米軍のLSTのような船の建造にかかった。しかし、この船は戦時急増に向かなかった。折りしも、海軍も陸戦隊用に同様の船を建造中であつた。これは後の二等輸送艦であつたが、陸軍はこれに着目した。そこで、陸軍はプロトタイプとしての建造を海軍に持ちかけた。

この結果陸海軍共同で建造されたのが、鴻龍型輸送艦であつた。

この船は昭和17年4月に竣工した。総トン数840t、97式中戦車8両を輸送可能であつた。起工から竣工まで2ヶ月半で作れる事から、戦時量産が可能な船であつた。ただ、初期型は航行性能がわるかった。そこで、後期型は機関の強化や船体の拡大を図った。また、後に4式等の大型戦車の搭載も可能なように設計しなおされた。これらは、後に後方輸送任務でも大活躍し、日本の救世主となつたのであつた。

海上機動旅団 下

海上機動旅団は、陸軍の島嶼戦においての上陸戦専門部隊として創設された。

部隊は当初、陸軍のみで編成されるはずだった。しかし、上陸戦において海軍との連携を密にする必要になってきたため、陸海軍の合同部隊となった。これは、上陸支援の艦砲射撃の弾着観測や、航空攻撃の直接支援要請を行うためには必要不可欠なことであった。また、合同創設のもう一つの理由として、海軍陸戦隊には島嶼戦の経験があつたのも大きな理由であつた。

開戦直後に行われたウエーク島上陸戦において、海軍は多くの貴重な戦訓を学んでいた。

航空機、ひいては制空権獲得の必要性。上陸時の沿岸砲台の脅威。上陸直前の大規模な艦砲射撃の必要性等であつた。

昭和17年2月時点において、海上機動旅団は2個旅団であつた。満州から抽出した陸軍の歩兵と、ウエーク島から帰った海軍陸戦隊員から編成された。

訓練においては、大発を使つての上陸訓練や、敵魚雷艇の接近を想定しての水上戦闘訓練、さらには陸戦隊員自身による妨害物を突破する大発の操艇訓練も行われた。海上機動旅団では、大発の乗員の代わりになれるよう、隊員には最低限の操艇技術が求められた。もちろん、陸上戦闘訓練も忘れてはいない。迅速に動き、水際のトーチカを素早く沈黙させる事が望まれた。

訓練開始当初は、英語や独自の用語を多用する海軍と陸軍の隊

員の折り合いが悪かったが、こうした問題は時間によって解決された。

戦車は当初、陸海共用の九五式軽戦車が用いられたが、その後二式水陸両用戦車や、四式水陸両用戦車も使われている。これらは潜水艦からの発進可能の機材もあり、大戦末期には泊地への奇襲雷撃や、後方攪乱に用いられたりもした。

初陣となったのはセイロン島上陸戦であったが、この時は有力な敵がなく、たいした活躍はしていない。

初めて活躍の機会を得たのは、昭和17年8月の米軍のガダルカナル島上陸時であった。

海上機動旅団は、航空機と艦隊の支援を受けて、揚陸輸送艦と戦車を用いての強襲上陸戦において、見事短期間にガ島を占領している。

その後、エスピリットサント強襲作戦や、樺太救援作戦など、彼らの活躍は枚挙にいとまがない。後に彼らが発展し、帝国海兵隊になることとなる。

第一次ソロモン海戦 序

1942年（昭和17年）8月7日、米軍はソロモン諸島の一角にあるガダルカナル島に上陸した。

当時、日本軍は豪州完全封鎖のためソロモン諸島沿いに航空基地を建設しつつあった。この時点で日本軍は、ブーゲンビル島ブインに陸攻も運用可能な大規模な基地を完成させ、続いてそれよりも南にあるコロンバンガラとバラレにも戦闘機用飛行場を完成させていた。

ガダルカナル島にも9月に海軍の設営隊が上陸し、基地の建設を開始して11月には航空隊を進出させて稼働させる予定であった。

だからこの米軍上陸は、上層部にとって大きな衝撃であった。もしこのガダルカナル島に米軍の爆撃隊が駐屯し、また有力な艦隊泊地となれば、既に完成しているソロモン諸島の基地のみならず、モレスビーやラバウルの安全が脅かされる事となる。

早速、このガダルカナルに上陸した敵軍を攻撃するために、ブインの陸攻と零戦隊計42機が出撃した。もちろん、米軍も全力でこれを迎撃した。

この日、ガダルカナル上空は修羅場となった。しかし、日本側は台南空の猛者達の活躍により、戦闘機35機、艦爆、艦攻併せて18機撃墜を報じた。（実際は両方合わせて29機）

戦闘機隊の奮戦とともに、陸攻も果敢に米豪艦隊に雷撃を仕掛けた。

結果は、駆逐艦2隻撃沈。輸送船3隻撃沈。上陸支援の戦艦「メリーランド」中破とそれなりの戦果をあげた。日本側の被害は戦闘機2、陸攻7であった。

日本側の被害が米軍に比して小さかったのは、基地との間が短い距離であった事と、陸攻が新型の防弾ゴム装備の22型であったからだ。

しかし航空隊の奮戦に関わらず、米軍は悠々とガ島に上陸した。たった40機強ではさすがに数が少なすぎた。

一方、日本側も艦隊を出撃させた。ラバウルにいた第8艦隊であった。ただし、この艦隊はラバウルにいた艦艇を軒並み集めた、いわば寄せ集めであった。重巡「鳥海」、「青葉」、「衣笠」、「古鷹」、軽巡「久里浜」、「夕張」、「揖斐」、駆逐艦5隻の計12隻であった。

このうち、軽巡「揖斐」は南方で拿捕した蘭軽巡の「トロンプ」で、駆逐艦は4隻がやはり捕獲した平甲板型であった。

艦隊は途中敵機に発見されながらも、数度の欺瞞工作を行って敵の目を欺いて、ついに夜半に突入した。

結果は日本側がお得意の夜戦の腕を見せつけ、重巡5、軽巡1、駆逐艦3隻を撃沈し、その他3隻に打撃を与えた。それに対し、味方の被害は2隻が小破したのみであった。

大勝利であった。この海戦は後に第一次ソロモン海戦と名づけられた。

しかし、肝心の敵輸送船攻撃は、夜明けが迫っていたため徹底せず、2隻撃沈、3隻に火災で終わった。これにより、米軍は一時的な弾薬と食料の不足をきたしたものの、戦力をしばらく維持するための物資を揚陸できた。

これが、一ヶ月半に及ぶガダルカナル戦の始まりであった。

第一次ソロモン海戦 序（後書き）

第一次ソロモン海戦は実際にあり、夜襲戦でした。そして、輸送船への攻撃不徹底も実際に起きた事です。

第二次ソロモン海戦 上

ガダルカナルに建設された米飛行場は日本軍にとって大きな脅威となった。そこから発進する爆撃機は日本軍の軍港、飛行場、さらにはソロモン諸島の基地へ向かう補給船団まで攻撃した。

さいわい、いずれも今まで防空戦闘機により大打撃は免れているが、いつまで続くかわからない。とくに、海軍の一式陸上偵察機が数度に渡りガ島、ヘンダーソン飛行場を撮影した。その結果、最初は戦闘機用飛行場一つだったのが、わずか10日の間に戦闘機用が2つ、爆撃機用1つの3つの飛行場に増えていた。

また飛行場のみならず、ルンガ岬には小規模ながら泊地も整備され、艦隊も寄港可能となっていた。

まさに、おそろべしアメリカの工業力と機械力。もちろん、日本側もただ見ていただけではない。ラバウルの陸攻やブインの戦闘機隊が積極的に攻撃を行っていた。しかし、落としても落としても敵機は現れる。いくら爆撃しても翌日には復旧していた。

海軍は、11月を目途にガダルカナルよりも南東にあるエスピリット・サントを攻略し米豪完全遮断を目論んでいたが、その計画はこの島の存在により、怪しくなりつつあった。

海軍はガ島の占領作戦を考えたが、現時点においてそれを行えば、米豪遮断作戦を最低2ヶ月は先送りせねばならなかった。

そこで、占領はしないまでも、飛行場をしばらく使用不能にさせる作戦が立案された。

機動部隊の一部を投入し、基地航空隊との共同による航空機の集中運用の上で飛行場と泊地を攻撃する。さらに、夜襲による戦艦の砲撃により完全撃滅する。

このための艦隊が急遽編成された。

戦艦は高速の「金剛」級が選ばれ、空母は「隼鷹」を中心とする第4航空戦隊が選ばれた。

4航戦は商船改造の「隼鷹」級2隻に正規空母「剛龍」と軽空母の「龍嬢」を加えた4隻で編成されていた。これに重巡2、軽巡2、駆逐艦16隻が参加する。司令官は角田寛治中将である。

艦隊は9月1日、補給と編成を終えてトラックを出撃した。

一方、このころガ島の米軍も苦しい状態であった。物資の不足も去ることながら、機体特に、戦闘機は補充しても次々と戦闘で消耗したからだ。

そこで、一気に多数の戦闘機を補充するため、正規空母「サラトガ」と「エンタープライズ」そして「ホーネット」が機体輸送を行うことと成った。

こうして、2つの機動部隊が吸い寄せられるように近づいていた。

一式陸上偵察機・・・100式司令部偵察機の海軍での呼称
空母「剛龍」・・・捕獲した英空母「インドミダブル」

第二次ソロモン海戦 上（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

第二次ソロモン海戦 中

ガダルカナルに向かう陸軍機輸送任務の米機動部隊を発見したのは、ガ島近海に哨戒任務を帯びて配置されていた伊21潜であった。

伊21潜は直ちに潜望鏡深度まで浮上し、無線アンテナを出して「敵機動部隊見ユ」の報告を打つとともに、決死の雷撃を敢行した。

米軍は既に電波傍受から伊21の存在に気づいていたが、この攻撃はかなりの遠距離からであったので、米軍は当初雷撃警報を発令しなかった。

しかし、爆雷攻撃へむかった駆逐艦の「オ布莱エン」が被雷、轟沈したので、ただちに警報を発令した。だが、この警報発令は遅すぎた。すぐに「サラトガ」に魚雷が2本が命中したからだ。

幸い「サラトガ」は沈没はしなかったが、魚雷による浸水で艦が傾き、火災も発生した。このため甲板上に繋止されていた機体は被害を拡大しないために全て投棄された。このため予想外の被害を米軍は被ってしまった。

ちなみに、伊21潜は爆雷攻撃によって帰還後廃艦処分となるほどの損傷を受けたが、なんとか脱出している。

一方、敵機動部隊見ユの報告を受けた角田機動部隊では、敵機動部隊へ攻撃隊を発艦させるかで議論となった。この時、攻撃隊を出撃させ、帰還すると夜間となることが確定的だった。このため、翌

朝まで待つべしという意見が多勢だった。これは四航戦の練度が低かったことと、攻撃すれば、完全に帰還が夜になるからであった。

しかし、闘将角田中将はただ引き下がる男ではなかった。

彼は、まず攻撃隊編成を練度が高い「剛龍」の航空隊のみとした。そして、この艦の艦載機は試験段階で搭載された新型の彗星と天山であった。この2機種は高速なので、敵の戦闘機を巻ける可能性が高かった。戦闘機はつけず、その2機種のみで編成した。

日没2時間半前、「剛龍」から第一波攻撃隊30機が出撃した。

攻撃隊は予想された敵戦闘機の妨害も受けず、敵艦隊に辿りついた。これは日没寸前で、敵空母が戦闘機を収容してしまったからであった。さらに、30機という微妙な数の編隊も、敵味方の判断を遅らせた。

結果、対空砲火を開始した時には既に手遅れであった。雷撃機は炎上するサトガに4本を命中させ、これを撃沈。爆撃隊は「エンタープライズ」の飛行甲板に3発を直撃させ、大破させた。日本側の損害は撃墜された2機と、帰還後事故を起こした1機のみであった。ただし、被弾などによって帰還後の廃棄処分が他に数機出た。

こうして、第二次ソロモン海戦が幕を開けた。

第二次ソロモン海戦 中（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

第二次ソロモン海戦 下

米機動艦隊への潜水艦による夜間攻撃の翌日、日本機動部隊では米機動部隊の動向を大いに気にしていた。この日の作戦計画で日本機動部隊は、夜明けとともにラバウルやブインから飛来する基地航空隊と共同し、ヘンダーソン飛行場への爆撃を行う予定であった。

角田中将は、米機動部隊が潜水艦の攻撃によって撤退していた場合は基地攻撃を優先し、米機動部隊が存在する場合は艦隊への攻撃を優先する予定であった。これは至極当然の判断であった。

一方米機動部隊では、損傷した「エンタープライズ」を後方に下げ、残存する「ホーネット」とヘンダーソンの基地航空隊とでの共同攻撃で、日本機動艦隊への攻撃を考えていた。

早朝から、両軍は多数の偵察機を飛ばし、敵の発見を求めた。

先に発見したのは日本側であった。機動部隊より発進した二式艦偵が敵艦隊を発見した。もちろん、その報を受けるや角田中将はただちに、3空母（「隼鷹」・「飛鷹」・「龍嬢」）から、零戦36、九九艦爆30、97艦攻30からなる攻撃隊を発艦させた。

一方、米軍も日本側に遅れること30分でSBD爆撃機が日本機動部隊を発見した。

しかし、米機動部隊にとっては不運なことに、「ホーネット」の攻撃隊は直援機が起こした前部甲板での事故の影響で、発艦が出来なくなった。

結局、直掩の戦闘機がでないまま米機動部隊は攻撃を受け、対空砲火により零戦2、99艦爆7、97艦攻6を撃墜したが、空母「ホーネット」軽巡洋艦「アトランタ」駆逐艦「ポーター」が撃沈された。

一方、日本機動部隊は空母艦載機の空襲は回避できたが、共同攻撃予定であったヘンダーソン飛行場を発進した米陸軍機の猛攻を受けた。

同攻撃隊による攻撃スキップボミングを採用した初めての作戦であったが、直掩機や2隻の戦艦や巡洋艦から発射される3式対空弾と強力な対空砲火に妨害され、実に戦闘機20、爆撃機40という膨大な数の機体を失った。

しかし、日本側も15発という被弾を受けた軽空母「龍嬢」が爆沈した。さらに、数発を被弾した戦艦「金剛」も被害を受けた。

最終的に、日本側はこの作戦を奇襲が不可能となったため中止した。一方、米軍も貴重な2隻の正規空母を失い、さらに輸送中に失われた分も含め、100機以上の陸軍機が南海に失われ、ガダルカナル基地航空隊はその戦力を大きく減退させる事となる。

この作戦以後、米軍はガダルカナルに艦隊を常駐させるようになる。一方の日本側はこの艦隊の撃滅を考え、後の戦艦「大和」投入へ繋がる事となる。

第二次ソロモン海戦 下（後書き）

評価お待ちしております。些細な事でも結構です。

海軍局地戦闘機迅雷

昭和15年に完成した零戦は、すばらしい戦闘機であった。当時、共産党軍や重慶政府軍と戦う中華民国南京政府への援軍として中国漢口へ派遣されていた海軍の零戦12機が、国境地帯に空襲へ来た中華民国重慶政府軍の戦爆連合40機の内29機を撃墜し、味方の損害ゼロというワンサイドゲームに終わらせるという快挙をなした。けた。

零戦の高性能に陸軍も着目し、その後一式戦闘機として採用している。ちなみに、陸軍使用は、主翼の20m機関砲が12.7mm機関銃にされ、また航続性能もカットされている。その分が、中島の試作戦闘機キ43と同等の防弾装備が施された。

後に、これが陸軍がフィリピン戦や南方戦線で活躍する原動力となる。

一方、この時期海軍は迎撃機の開発も急いでいた。陸軍は中島に、海軍は三菱にそれぞれ機体を発注していた。

しかし、三菱が開発していた一四試局地戦闘機として開発中の機体は、設計者が他機との兼任であったので、開発が遅れていた。

そこで、中島の一式戦闘機が零戦にその座を奪われた代償に、海軍の局地戦闘機枠に中島のキ44を採用させる意見が出た。

キ44は、陸軍でも期待されていた機体であった。しかし、エンジンの不調に悩まされていた。そのため、当初海軍側は採用を渋った。

しかし、一四試の方も試験段階で振動が出ることが確実視されていた。それに加えて、量産可能になるのは昭和18年になる予定で

あつた。これでは遅すぎた。

そこで、多少の稼働率の低調は、エンジンの量産によって解消する見込みがあるということから、結局、昭和16年8月に、海軍は二式局地戦闘機迅雷として採用した。

海軍版は主翼に20mmを装備していたのが唯一の陸軍キ44との相違であつた。

実戦では、12月9日に台湾へ来襲したB17の迎撃に初出撃し、5機中4機を撃墜した。

これを波きりに、その後米爆撃機相手に大活躍した。

しかし、南方ソロモン諸島方面では、やはり稼働率の低さがたたり、また航続性能の不足もそれに拍車をかけた。その後登場した海燕や零戦32型にその座を渡す事となる。

迅雷という名称は、学研刊行の黎明の艦隊登場機から流用しました。

海軍局地戦闘機迅雷（後書き）

評価お待ちしております。

欧州より愛を込めて（前書き）

欧州より愛を込めて

1942年後半、ドイツ軍のスエズ運河獲得により、日本は地中海経由で欧州との交易が可能となった。戦時中で取引量は少なかったが、その意義は大きな物であった。

ドイツが連合国との講和を結ぶまで、日本は数多くの物品を買い込んでいる。

日本軍に大きく寄与した物をあげるなら、一つ目にHe280がある。

これはハインケル社が世界に先駆けて作り上げたジェット戦闘機で、1942年中に試験的であるがドイツ国内の基地に実戦配備され、連合軍を驚かせている。後のMe262に比べれば一段劣る性能であるが、当時としては革新的であり、日本も3機を購入している。これが後に、四式噴進戦闘機菊花を生み出すことに大きく貢献する事となる。

2つ目に、これはドイツ軍の物とは言えないが、イタリア製のDB601エンジンがある、このエンジンは、キ140として日本でコピーされ、三式戦闘機飛燕の心臓となったエンジンであるが、日本のエンジン製造技術では性能にバラツキがでた。そこで、イタリアから約200基が輸入され、120機の飛燕に装備された。

三式戦は早い段階で、エンジンの不調が理由で空冷に転換されてしまったが、このイタリア製エンジン装備機は素晴らしい性能を誇り、設計者を安堵させた。これらの機体はカスタムタイプとして、本土防空用に使われたため、実戦には使われなかった。

3つ目は、誘導魚雷。

後の誘導魚雷の祖とも言ふべきこの兵器を、日本も数基購入し、そして全自動誘導魚雷回天として実用化している。ちなみに、日本の回天はドイツの誘導魚雷と違い、大きさが潜航艇並であり、その

破壊力は酸素魚雷の3倍といわれた。実戦へ投入されたのが終戦3ヶ月前なので、その時期の遅さが悔やまれるが、米空母ミッドウェイをたった一本で行動不能にし、米海軍に深刻な精神的ダメージを与えた事は、大きな戦果といえる。

この他に、様々な物が帝国にもたらされた。後に六式主力戦車となるタイガー1、2型重戦車。帝国海軍でも魚雷艇の手本としたSボートの設計図。

これら多くの物資が日本に貢献したのであった。

欧州より愛を込めて（後書き）

実際、日本はタイガー戦車の購入を考え、代金も支払いました。
回天は、角川書店の翼に日の丸より引用しました。

御意見・感想、評価お待ちしております。

第三次ソロモン海戦 上

1942年10月、風雲急を告げる南太平洋戦線。日本側は開戦以来戦術的勝利を収めて来たが、この時期になると、国力の違いが見え始めていた。特に、熟練パイロットの消耗が激しくなりつつあった。

日本は、対米参戦をにらみ、昭和15年頃から、海軍予科練、陸軍飛行学校を増設し、それらの定員を増やしていた。また、事実上保護国の満州国の空軍を強化し、満州方面での航空戦力の肩代わりを画策していた。開戦後には、良質な燃料が豊富な南方に訓練飛行隊を派遣するなどの策も取っていた。しかし、米英相手の戦争を行っている状況では、それでも不足であった。

そんな中で、日本としてはガダルカナルで戦力、特に航空戦力を消耗するのはマズイ事態であった。既に、メキシコ経由でアメリカ海軍が空母、戦艦の量産を行っているのを察知していたので、日本としてはその米軍の整備が始まる前に戦力を大きく消耗するのは死活問題であった。

そこで、立案されたのが、戦力集中を持って、短期間にガダルカナルからエスピリットサントを攻略する作戦であった。

この時点において、日本海軍は第一機動部隊の6空母、その他軽空母や改装空母4隻、戦艦8隻が動員可能であった。これは、この時点においての米太平洋艦隊の総力を上回っていた。

作戦第一段階はガダルカナルへ占領であった。

これには、海上機動旅団と上陸支援艦隊が充当されることとなっ

た。しかし、米軍がガ島方面へ戦艦を配備したことから、連合艦隊は戦艦長門・陸奥の第二戦隊を投入する事となった。

ガ島総攻撃の日は10月15日と定められ、ソロモン諸島の各航空基地に航空戦力が集められた。

そして、10月12日、第二戦隊と第二航空戦隊で編成された第3艦隊が出撃した。司令長官は山口多聞中将である。

一方、米軍は頻繁に変更されるようになった日本の暗号に翻弄されながら、長距離偵察でようやく日本の狙いがガダルカナルと突き止め、戦艦ノース・カロライナ、ワシントン、そして真珠湾の傷いたウエスト・バージニアも加わった艦隊が、常駐された部隊への増援として派遣された。ただ、空母は残存するのがエンタープライズとワスプのみのためいない。

この2艦隊が、ぶつかろうしていた。後に、第3次ソロモン海戦と呼ばれる海戦の始まりであった。

第三次ソロモン海戦 上（後書き）

短編として、幻艦記の世界観での満州空軍の飛行を書いた満州的
天空軍を書きました。そちらもお願いします。

第三次ソロモン海戦 中

第三次ソロモン海戦の序章は、ラバウルを始めとする基地航空隊のガダルカナルへの攻撃で始まった。艦隊の突入を助けるべく、かき集めれる戦力を全て投入した。ポートモレスビー方面から一部引き抜いてまで集められたその戦力は、戦闘機120、艦爆36、艦攻30、陸攻60という膨大な物であった。

一方、守る側のガダルカナルは、先日の第二次ソロモン海戦で消耗した分の増援を併せて、戦闘機は約150機があり、この内稼動する130機による防空戦闘を行った。

この時の戦闘の様子は、かつてのバトル・オブ・ブリテンに匹敵するほど凄まじい物であったと言われている。

最終的に、米側は撃墜、地上撃破併せて96機の機体を失った。日本側も戦闘機29、陸攻24等（帰還後の修理放棄機含む）を失うという甚大な損害を負ったが、これによってガダルカナルの基地能力が一時的に麻痺した。

一方、その間に接近した第二艦隊は、ガ島近海で米戦艦部隊を発見。これに航空攻撃を仕掛けた。

この時は、米側に空母の随伴が認められなかったため、戦闘機も60kg爆弾で爆装した。

2空母から飛び立った78機は果敢に攻撃を行ったが、米艦隊の対空砲火は新型の対空気銃や、防空巡洋艦によって飛躍的に増強されており、未帰還15、修理不能機12という損害のわりには撃沈は防空巡洋艦アトランタ、駆逐艦ポーター、オノバンのみ。その他

に戦艦ウエスト・バージニア、巡洋艦サンフランシスコ損傷という結果に終わった。

この結果に、艦隊司令長官山口中将も驚きを隠さなかった。

「米艦隊の対空能力は飛躍的に向上しているようだ。我が軍の九式高射装置も大した物と思っていたが、新型の高射装置の実戦配備を急がせねばな。」

これが原因となって、後に三式高射装置が実戦配備されることになる。

こうして、航空戦では海戦の決着はつかず、山口中将は戦艦による夜間砲戦を決断した。

そして、両艦隊は夜半に接触した。

米軍のリー中將はレーダーによる優位を確保しようとしたが、それに対し、山口中將も秘策を用意していた。

第三次ソロモン海戦 中（後書き）

九九式、三式高射装置の元ネタは、米田淳一先生のスパ―防空巡洋艦綾瀬よりもらっています。

第三次ソロモン海戦 下

夜半、日米両艦隊は接触した。米艦隊司令官リー中将はレーダーによる遠距離射撃を目論んだが、山口中将はこれに対し、水上機によるチャフ散布を行い、電波妨害を行った。これにより、米軍のレーダーによる有利は崩れた。それどころか、水上機は同時に照明弾を投下し、米艦隊を映し出した。

初弾を発砲したのは日本側で、長門・陸奥から発射された40cm砲弾は、全弾近弾となって米軍に襲い掛かった。日ごろの訓練の成果を見せ付けた形となった。

一方、米戦艦3隻も相次いで発砲した。

両艦隊とも第五斉射までは有効弾を得なかった。

しかし、長門の第五斉射が2発ノースカロライナに命中。後部のカタパルトと左舷の高角砲3基を吹き飛ばした。さらに、陸奥もウエスト・バージニアの2番砲塔に命中弾をだし、これを全壊させた。この瞬間、日本側の水兵の多くは勝ったと思った。しかし、神は公平な判断をした。米艦隊の砲弾も有効弾を出した。しかも、米軍は2番艦の陸奥に集中射撃を行った。結果、陸奥は9発の直撃弾を喰らい戦闘不能となった。

こうして、長門は3対1に追い込まれた。しかし、この後米戦艦は有効弾を出せなくなった。水柱がどの艦の物が判別できなくなったからだ。

一方、中小艦艇同士の戦いは、日本側有利で進み、日本側は駆逐艦暁が沈没したのみに対し米軍は重巡サンフランシスコ、軽巡ジュ

ノーと駆逐艦3隻が既に沈んでいた。

そして、防衛陣を突破した軽巡由良がウエスト・バージニアに肉薄し、魚雷4本を命中させた。由良は副砲による反撃を受け爆沈したが、ウエスト・バージニアも20分後に沈没した。

戦いは混戦になったが、天は日本側に味方した。

長門の砲弾がワシントンを捉えた。この内一発がワシントンの二番砲塔のターレットを歪ませ、さらに一発が3番砲塔の砲身をなぎ払った。

これにより、リー中將はワシントンを戦域離脱させようとした。しかし、操舵を誤って座礁してしまい。そこを重巡足柄と軽巡長良に捕まり、結局ワシントンは拿捕、リー中將は捕虜となった。

残ったノースカロライナは脱出し帰還したが、最終的にガダルカナル防衛は失敗した。

こうして、艦隊が消えたガダルカナル島に上陸艦隊が接近し、米軍飛行場と陣地に三式弾を雨、霰とばかりに打ち込み、その機能を奪い去り、そこへ6000名からなる海上機動旅団が航空支援の下上陸し、ついにガダルカナルは陥落した。

米軍2万の内、2千が戦死し、1万8千は翌日夜半撤退した。

こうして、日本は勝利した。しかし、陸奥は結局沈没し、長門も中破するという無視できない損害も負ったのも事実であった。

第三次ソロモン海戦 下（後書き）

ワシントン拿捕は、コスミック出版の独立愚連艦隊が元ねたです。

豪州封鎖作戦 上

昭和17年10月。ガダルカナル島が陥落し、米軍は窮地に立たされていた。ガダルカナル戦で、貴重な空母と戦艦を2隻づつ失い、太平洋艦隊に残存する艦艇は戦艦3、空母2となってしまうた。

戦艦は、新鋭のサウス・ダコダ、そして真珠湾の傷癒えたメリーランドとテネシーである。

空母は、エンタープライズとワスプである。

対し、日本側は稼動する空母は正規空母だけで7、改装空母は5であった。これはもはや圧倒的な戦力差であった。

太平洋艦隊を預かるニミッツ提督としては、あと3ヶ月も辛抱すれば、最新鋭のエセックス級正規空母とインディペンデンス級軽空母が各1、サウス・ダコダ級戦艦2に、修理を終えたノース・カロライナが戦列に加わり、日本側に拮抗する戦力を持てるというのに、日本軍はガダルカナルを占領した勢いに乗ったまま、一気にエスピリット・サントに上陸せんとしていた。日本としては、ここで米艦隊を壊滅させ、豪州やニューギニアランドだけでも連合軍陣営から離反させる必要があったのだ。

あと当てになる戦力は陸上航空隊のみだが、エスピリット・サントにあつまつたのは陸軍・海軍・海兵隊の各種機体併せて350機だけであった。この内日本艦隊迎撃に使えるのは280機程度であった。

これは、ソロモン方面での消耗が激しかったことと、ドイツ本土空襲のため戦力が引き抜かれたからであった。これではとても充分

な数とは言えない。しかし、日本は待つてくれなかった。

11月1日、トラック島を日本艦隊が出撃した。戦艦6、空母10の、セイロン島攻略作戦以来の大艦隊であった。

これに対し、米軍は全力で反撃する以外に手はなかった。もし、エスピリット・サントが陥落すれば、ソロモンの海は完全に日本の手に渡り、豪州が孤立する可能性があった。そうなれば、豪州が単独で日本と和平を結ぶ可能性も捨てきれなかった。豪州は潜水艦の基地や、補給ルート確保の上で、なんとしても必用な拠点であった。それを日本に渡すわけにはいかない。

後に、豪州封鎖作戦と呼ばれた日本のエスピリット・サント攻略戦にともなう戦いはこうして始まった。

豪州封鎖作戦 上（後書き）

今回の話では、特に基にした小説はありません。ただ、豪州封鎖については、各種小説にて既に取り上げられているので、別段珍しい物ではないでしょう。

豪州封鎖作戦 中

エスピリット・サント攻略戦は、まず米軍の攻撃から始まった。ニミッツ元帥はお得意の潜水艦による攻撃を掛けてきた。6隻の潜水艦による集団攻撃、ウルフ・パック（群狼戦術）である。

しかし、米軍の第一撃は失敗に終わった。この時、米潜水艦同士の連携が上手くいかず、バラバラの襲撃となつてしまい、そこを対潜哨戒機によつて各個撃破され、結局空母護衛中の巡洋艦愛宕に一本を命中させるために、3隻が沈没、1隻が浮上後降伏。2隻のみがなんとか遁走した。

一方、日本機動艦隊は早々と偵察機によつて、米艦隊を捕捉した。ここで会ったが百年年目とばかりに、司令官山口多聞中将は総数240の攻撃隊を発艦させた。

米機動艦隊は、新鋭のF6F、SB2C等に艦載機を切り替えていたが、日本側も零戦は1500馬力エンジンを積んだ32型に、爆撃機・攻撃機も2000馬力クラスのエンジンを積んだ彗星と天山に半分を切り替えていた。

米軍は直掩機50機を上空に張り付かせていたが、結局日本攻撃隊を阻止する事は叶わなかった。F6Fは零戦と互角の戦いをするのが精一杯で、攻撃機や爆撃機には手出しできなかった。

一方、米艦隊は輪陣形を組み、防空艦を配していたが、日本軍の新鋭機の数に射撃装置を合わせていなかったため、最初の5分間、有効な対空戦闘を行えなかった。この5分間に、日本攻撃隊は、防空戦闘を行う戦艦ノース・カロライナを中破させ、その穴から空母2隻に襲い掛かった。

最終的に、米太平洋艦隊最後の空母は2隻とも、日本機動部隊へ攻撃隊を発進させぬまま南太平洋に消え去った。

その他に、巡洋艦と駆逐艦併せて5隻が沈み、残る艦艇もオーストラリアに脱出するしかなかった。

こうして、機動部隊同士の戦いは日本側の一方的勝利で終わった。しかし、まだ不沈空母であるエスピリット・サントが残っていた。日本機動部隊が敵機動部隊への攻撃を行っている頃、米陸上基地航空隊の攻撃隊が日本上陸部隊へ襲い掛かっていた。

豪州封鎖作戦 中（後書き）

零戦32型は史実の54型と想像していただければ結構です。

豪州封鎖作戦 下

機動部隊同士の戦いが日本の一方的勝利で終わった頃、日本軍の上陸支援艦隊と、その後方の陸軍輸送船団では、エスピリット・サントより発進した米軍の基地航空隊の激しい空襲を受けていた。

この時、上陸艦隊にはあきつ丸、にぎつ丸、ときつ丸の3隻の空母があり、各船12機ずつの零戦を搭載していた。また、後方の輸送船団の護衛には、軽空母の大鷹、雲鷹が付き添っており、それぞれ18機ずつの零戦を搭載していた。

米軍偵察機が飛来した時、上空にいた零戦は15機に過ぎなかったが、攻撃隊の接近に備え、21機に増やされ、また15機が即時発進可能体制に入っていた。

しかし、米軍は200機という大編隊でやってきた。艦隊は発進していた36機に加え、さらに7機を発進させたが、そこで時間切れとなり対空戦に入った。

上陸艦隊の各艦、特に対空火力を強化した戦艦山城・扶桑は猛烈な弾幕を張った。また、直掩の戦闘機隊も果敢に突撃し、敵機を撃墜していった。

しかし、敵は数に物を言わせた。まず、最初に陸軍船団護衛の平甲板型駆逐艦堇が反跳爆撃により2発の500ポンド爆弾を受け大破、後自沈処分。

次に、同じく船団護衛の巡洋艦古鷹が実に8発の直撃弾を受け轟沈した。

また、戦艦扶桑も1発直撃弾を受けたが、幸いこれによる被害は

ほとんどなかった。

最終的に、空襲は約1時間続き、日本側は重を含む駆逐艦3隻、巡洋艦古鷹、名取を失い、さらに7隻に大きな打撃を受けた。しかし、輸送船の被害は1隻炎上ですみ、さらに敵機を100機近く撃墜した事から、この犠牲は報われたと言えるよう。

敵機動部隊、及び基地航空隊の攻撃を跳ね除けた日本軍は、翌朝機動部隊艦載機と戦艦部隊による艦砲射撃の掩護の元、まず強襲部隊の海上機動師団が上陸、続いて2万の陸軍兵が上陸した。米軍は勇敢に反撃を続けたが、3日後ついに降伏した。

こうして、豪州封鎖作戦は成功裏に終わった。

翌日、中立国経由で、豪州、ニュージーランドに対し、講和交渉の打診が行われた。

もはや、頼みにする米軍は全滅し、両国はこの提案を飲むしかなかった。

最終的に、講和交渉は1カ月後にシドニーで行われ、日本軍のラバウルまでの後退を条件として、両国は講和した。

在豪米軍は総撤退し、ここに、南方戦線は消滅した。日本軍は中部太平洋方面での米軍との対決に、全力を望めるようになったのである。

1943年。日本にとってはまさに順風満帆。アメリカにとっては悪夢から覚め切らぬ内にこの年は明けた。

前年の日本と豪州、ニュージーランドとの講和は、アメリカを含む連合国側にとって、まさに信じられない事態といってよかった。まさか、極東の小国日本がここまでやるとは誰も信じていなかったからだ。

日本とオーストラリアは講和後、早速民間レベルでの貿易を再開した。軍需品に関しては、オーストラリアが中立国宣言をしたため、戦時国際法違反となり行えない。

しかし、ここで日本は悪知恵を働かせた。

さて、この時日本は南方各地に独立国を誕生させていた。それらの国は、米国などには承認されていない為、国際法の定める交戦国の条件に当てはまらない。そこで、日本は豪州に対し軍需品をこれらの国々への輸出品とさせたのだ。もちろん、そこで今度は日本向けの輸出品となって物資は日本へ渡った。

この方法で、日本は豪州から多数の軍需品を習得している。もっとも、豪州では日本のように大規模で目立った軍需産業はない。

それでも、魅力的な物は数多くある。例えばT6型テキサン練習機や、戦時標準船。そして大型の航空機用プロペラである。これらは目立つ物ではないが、なくてはならない物である。

T6型練習機は二式中等練習機の生産不足を埋め、一部は満州や中華民国南京政府にも引き渡されている。また、航空機用大型プロ

ペラは、陸軍の飛燕や疾風といった戦闘機の性能向上に役立てられている。

日本側にとってなにより嬉しかったのは、小麦や砂糖などが輸入可能になったことであった。これによって配給する食糧の減少に歯止めをかけ、なおかつ飢饉気味であったベトナム方面の食糧事情の改善に一役買った。

一方、これ以外にも日本側にとって嬉しかったのは、米軍が持ちきれずオーストラリアに残っていた兵器類であった。

これらは、一端はオーストラリアに譲渡、または買い取られたが、今度は鉄くずなどの扱いで、東南アジア経由で日本にもたらされた。その中には損傷していたものの、修理さえすれば使えるガトー級潜水艦や、日本にとっては喉から手が出るほど貴重な工作艦。艦齡の新しいリバモア級駆逐艦も含まれていた。これらは日本にとって貴重な戦力となるのであった。

決戦への序曲高まる。

昭和18年3月。太平洋戦線は膠着したままであった。しかし、日本側では前年の豪州との講和以降、国内では食料配給制度の緩和など、国民の中に余裕が生まれ始めていた。アジア諸国も正式に次々と独立を果たしていた。

軍事では、連合艦隊司令長官が古賀大将から豊田大将に交代し、さらに軍備の更新や増強を行っていた。

このころ、満州の旅順海軍工廠では、天城級巡洋戦艦が相次いで竣工していた。また、内地の工廠では水上機母艦改装航空母艦四隻が相次いで完成していた。さらに、秋月級防空駆逐艦や夕雲級駆逐艦も続々と竣工していたこれによって、艦隊の編成替えが行われ、第一から第四までの航空艦隊が編成されていた。

第一は、空母瑞鶴を旗艦として空母4、巡洋戦艦2、重巡2、軽巡2、駆逐艦16から編成されていた。司令長官は山口多聞中将。

第二は、空母赤城を旗艦として空母2、改装空母4、戦艦2、重巡2、軽巡2、駆逐艦12から編成されていた。司令長官は角田覺治中将。

第三は、空母伊勢を旗艦とする空母2、軽空母4、戦艦2、重巡3、軽巡1、駆逐艦12から編成され、司令長官は原忠一中将。

そして、第四は空母歴新屯を旗艦とする空母2、戦艦1、重巡2、軽巡3、駆逐艦10からなり、司令長官は矢田勝一少将。

これら機動部隊はそのほとんどが28ノット以上の高速機動が可能な次世代機動部隊であった。

第四は4つの機動部隊の中で特に異彩を放つ艦隊である。

旗艦の歴新屯は珊瑚海海戦で拿捕したレキシントンである。名前が米軍の物を使っているのは、無線情報での敵霍乱を狙った物である。

また同艦隊の戦艦能巢加呂雷那も米戦艦ノースカロライナの後身である。その他の艦艇も多くが日豪講和の際、損害が甚大でオーストラリアのドッグに放置された米艦艇である。

ただこの艦隊、他の艦隊よりも格下とされ、司令長官も少将となっている。

その他の機動部隊について言えば、戦艦は皆高速の金剛級であるが、一部は後2隻竣工する天城級との交換が決定されていた。

また、駆逐艦の秋月級は、5番艦から魚雷を降ろし、10cm連装対空砲5基に対空能力を強化し、さらに新型の高射装置と載せている。

これらの艦隊は来る米機動部隊との決戦に向けて、訓練を開始した。そして、6月、運命の北太平洋海戦が行われることとなる。

決戦への序曲高まる。（後書き）

空母レキシントン拿捕は橋本純先生の第七航空艦隊戦記を元にしています。

米艦艇の命名は徳間書店の紺碧の艦隊を元にしています。

北太平洋海戦 上

1943年6月時点で日本海軍上層部が危惧していた事に、米太平洋艦隊の早期復活があった。この時期、メキシコを始めとする中立国やドイツ経由で、日本は米海軍が100機搭載可能のエセックス級正規空母30隻に、大和級に匹敵する新式の40cm50口径砲を搭載したアイオワ級戦艦6隻を建造中という情報を手に入っていた。

これらの艦艇の内何隻かは大西洋に回されるであろうが、それでも大部分は太平洋に回されるという予測を立てていた。

情報では、これら全てが揃うのは1945年初頭頃とされていた。一方、日本海軍では戦艦では1944年度中に大和級4番艦の近江、空母は雲龍級6隻が竣工させるのが精一杯であった。

米海軍の増強を許してはならない。逐次各個撃破するのが望ましい。その中で立案されたのがY作戦であった。

この作戦では、まず米軍の哨戒拠点であるフレンチ・フリゲート礁とミッドウエイ島を攻撃、その後真珠湾からつり出した米機動艦隊を叩き潰すという作戦であった。

この時点で米太平洋艦隊は正規空母3隻、軽空母4隻が戦闘可能であった。艦載機は軽480機を搭載し、充分日本機動艦隊と戦えるだけの実力を有していた。

米機動部隊を完全撃滅する為、日本側は徹底した作戦の秘匿と、敵に倍する戦力を確保する必要があった。

結果、日本海軍は戦艦大和を旗艦として、戦艦3隻を擁する海上打撃部隊の第二艦隊と、第一から第三までの航空艦隊を動員した。

さらに、護衛空母に守られた補給部隊も参加する大作戦であった。

作戦発動予定は6月15日であった。

一方の米太平洋艦隊は、前述した機動部隊が戦闘待機態勢に入っていた。これは、別に日本の動きを掴んだわけではなく、米海軍がマニラ方面への空襲を行う作戦を計画していたからであった。作戦発動予定は6月20日であった。

しかし、この米軍の目論見、いや米軍だけでなく日本軍の目論みも、ある事態によって暗礁に乗り上げた。

米太平洋艦隊所属の潜水艦ブルーギルがフレンチ・フリゲート空襲に向かう日本艦隊を発見したのだ。それは、空襲開始予定6時間前であった。

ブルーギルは対潜駆逐艦により撃沈されたが、彼女が死ぬ間際に送った報告は真珠湾に届き、直ちに、米機動部隊は日本艦隊撃滅の為に出撃した。これが、北太平洋海戦の序章であった。

北太平洋海戦 上（後書き）

今回の話には、川又千秋先生の翼に日の丸を大いに参考にしています。

北太平洋海戦 中

フレンチ・フリゲート礁攻撃を目前にして米潜水艦に探知されたのは、同地爆撃へ向かっていた第三機動艦隊であった。

発見された時、参謀の間に作戦を中止するべきという声が出た。

しかし、艦隊司令長官の原忠一中将は作戦を続行した。

これは、米機動部隊がパールハーバーを出港してくるまでに時間がかかると考えたからだ。また、潜水艦にとつて大敵である二つの基地を攻撃するう戦略的価値にも注目していた。ただし、念を入れて作戦開始時刻を繰り上げたが。

そして、予定より3時間早く、第一波攻撃隊が出撃した。

この時、フレンチ・フリゲート礁には水上機母艦、駆逐艦、敷設艦各一隻の計3隻の艦艇と6機の飛行艇が配備されていたが、この内飛行艇は潜水艦の報告を受けて全機哨戒に出撃しており、礁内にいたのは艦艇のみであった。

120機の第一波攻撃隊はこの艦艇と環礁内の諸施設を攻撃。これらを全滅させた。

戦果確認終了後、第三機動艦隊は全速で現海域を離脱した。

こうして、作戦第一段は大成功に終わった。

続いて、第一、第二機動艦隊によるミッドウエーへの攻撃も行われた。

こちらは96機の第一波、87機の第二派と分散攻撃を行った。

結果は猛烈な砲火と、迎撃戦闘機の待ち伏せを受けた。

しかし、幸いな事に同地米軍航空隊の戦闘機は型落ちした形式ばかりであり、また対空砲火も新型の日本機のスピードについていけなかった。それでも、未帰還は両攻撃隊合計20機を出した。

滑走路を始め、格納庫や管制塔、弾薬庫等の航空機関係施設が集中的に狙われた。

この攻撃でミッドウェイの基地施設ならびに航空隊は壊滅した。こうして、米軍は2ヶ所の目を潰された事となる。しかし、そのミッドウェイ空襲前に発進したPBYカタリナが航空機を収容中の第二機動艦隊を発見した。

PBYは直掩の零戦に撃墜されたが、それまでに太平洋艦隊司令部に宛3通の発見電を発信した。既に出撃していた米機動艦隊は直ちに北上を開始した。

一方、この米機動艦隊も、日本の伊号21潜水艦に捕捉された。日本側は3つの機動部隊の集合を急ぐとともに、その後伊号21が見失った米機動艦隊発見に全力を注ぐ事となった。

しかし、一日目は両軍ともそれ以上の捕捉は出来ず、機動部隊同士の間決は2日目に持ち越された。

北太平洋海戦 中（後書き）

フレンチ・フリゲート、ならびにミッドウェイ攻撃は角川書店の翼に日の丸を参考にしています。

北太平洋海戦 続下

北太平洋海戦2日目。両軍は夜明けからそれぞれもてる索敵能力を総動員し、敵艦隊の捜索を行っていた。

しかし、この時米軍は偵察に鈍足なTBF艦上攻撃機やSB2C艦上爆撃機を使用した。このため、偵察に時間を食ってしまった。

一方の日本側は最新鋭の彩雲や瑞雲を使って偵察を行っていた。そして、重巡利根より発進した機体がついに米機動部隊を捕捉した。

日本側はただちに、3つの機動部隊から延べ360機からなる第一波攻撃隊を発進させた。

一方の米軍もほぼ同時刻日本機動部隊を発見した。しかし、これは主力部隊後方の補給部隊であった。この時、補給部隊には商船改造の海鷹、翔鷹、そして航空給油艦の鷹野級3隻がいた。

鷹野級は言ってみれば給油艦に飛行甲板を取り付けたもので、搭載機は零戦9機、97艦攻5機であった。そのため、不慣れな米搭乗員が正規空母と見誤った。

米軍はこれを主力部隊と誤認。この部隊へ向かって270機からなる第一次攻撃隊を発進させた。しかし、この30分後に、偵察機から訂正電と、別の機からの主力部隊発見の報を受け、急いで第二次攻撃隊200機を発進させようとした。ちなみに、第一次攻撃隊は既に燃料を消費していた為、結局最初の目標に向かった。

しかし、米軍の不運は続いた。第二次攻撃隊5分前になって、日本機の大編隊がやってきたのだ。

これではもう攻撃隊を出すところではない。ただちに対空戦闘に移った。

複数の防空駆逐艦を連れ、それらが作る輪陣形の中心部にいる米空母に向かって日本機は果敢に攻撃を仕掛けた。

結果、艦爆の3割、艦攻の4割が撃墜されるか、帰還後廃棄されるという大損害を喰らった。しかし、彼らもただやられたばかりではなかった。

まず旗艦であったエセックスには500kg爆弾4発、魚雷3本を命中させ大破させた。続いて同級のホーネットに爆弾ばかり7発を命中させた。これによりホーネットは大火災が発生、しかも一発がダメコンチームに被害を与え、復旧が送れ結局ホーネットは沈没した。

この他に、軽空母プリンストン、モントレイが沈没。正規空母レキシントン、エンタープライズが大損害を受けた。また、対空砲火を行っていた巡洋艦1隻と駆逐艦3隻が沈められた。

空母9隻中6隻が航空機の運用不可能となり、事実上米機動部隊は壊滅した。

しかし、米攻撃隊も一矢報いていた。

北太平洋海戦 続下（後書き）

鷹野級は学研の旭日の戦旗より出しています。

北太平洋海戦 下

日本機動部隊の攻撃隊が米機動艦隊へ痛撃を与えたのと前後し、米第一波攻撃隊も日補給部隊に襲いかかった。

補給部隊は持てるだけの戦闘機を上げ、艦隊を密集させ猛烈な弾幕を張った。

結果、日本側の零戦は64機中31機を失いながらも、対空砲と協力して実に米軍機79機を撃墜した。これは快挙と言えるが、それでも全ての米軍機を止めるのは不可能だった。

結果、対空戦闘を行っていた軽巡那珂、駆逐艦2隻、そして給油空母竜飛、給油艦鳴門が失われた。その他にも3隻が損傷するという被害を受けた。

日本側に見れば、たとえ補助艦といえど失われていい筈がない。特に、艦隊随伴可能な高速給油艦は数が少なく貴重であるのに、それが2隻も失われたのは大きな打撃であった。

一方、補給部隊への攻撃に遅れること数十分。日本主力機動艦隊も、米第二派攻撃隊の空襲を受けた。

こちらは艦隊が新型の電探を装備し、なおかつ直掩戦闘機の数を充分に揃え、さらに新型の防空駆逐艦を含んでいた為、120機中87機撃墜という大戦果を挙げた。ただし、重巡三隈が不運にも敵急降下爆撃により弾火薬庫に直撃弾を受け轟沈した。また、対空戦闘に気を取られたのか、米潜水艦の接近に駆逐艦が気づけず、空母加賀への雷撃を許す事となった。加賀は3本の魚雷を受けた。その

後燃料タンクからの火災がひどく、味方巡洋艦の艦砲で処分された。加賀の撃沈は、海戦以来、無敵機動艦隊であった6隻のの一角が崩れ去った事を意味し、艦隊の兵士の士気にダメージを与えた。

結局、この海戦で日本は米空母の3分の2に被害を与えたものの、補給部隊への攻撃で給油艦を失ったことにより艦隊の燃料が不足し、敵機動部隊へのとどめの攻撃を行えぬまま撤退した。

一方の米軍にしても、再建途中の機動部隊の空母3分の2と、ようやく練成が済んだ多くのパイロットを失ったことは痛恨事であった。

この海戦後、日本海軍は次期艦戦である烈風と流星の開発を急がせることとなる。

また米軍も新型対空砲弾のVT信管つき砲弾の正式採用を急がせる事となる。

米軍反攻開始

北太平洋海戦後、日本軍首脳部は北太平洋海戦で敵に与えた損害から米軍の侵攻は最低でも10月まではないと予測していた。それまでに、各地の基地航空隊を強化し、返り討ちにする態勢を整える予定であった。

しかし、米軍の再生能力は驚異的であった。

8月18日、中部太平洋の最前線と言えるウエーク島に突如米機動部隊から発進した攻撃隊が襲い掛かり、現地駐屯の航空隊に大打撃を与えていった。

この攻撃直後、日本側は血眼になって米機動部隊の所在を掴もうとしたが、捕まえる事は出来なかった。

その後、米機動部隊は予想外の地点に現れた。タラワである。

タラワには陸戦隊と航空隊が駐屯していたが、まさか米軍が侵攻してくるとは予想していなかった。

8月25日、タラワに延べ300機の米軍機が来襲した。

この時、タラワには零戦36、二式水戦8機が存在し、それらは全力で迎撃にあたったが、最終的に米軍機40機を撃墜して全滅した。その他に、滑走路使用不能、停泊中の小型貨物船1、撃沈という被害を被った。

翌日、米機動艦隊はタラワを包囲し、猛烈な艦砲の雨を浴びせた。さらに、その後航空攻撃も連続して行い、さながら島は活火山の様相を呈した。

8月27日、航空偵察の結果安全と判断された同島に米海兵隊2

万が上陸を開始した。しかし、彼らが海岸に着岸した直後、日本軍の火炮が火を吐いた。

実は、タラワに日本軍は地下要塞を築いていた。もちろん後のサイパンや北千島に比べれば茶々な代物であるが、それでも守備隊2000を艦砲射撃から守るのには充分であった。

結果、その後米軍は7日間に渡る攻防戦の末、米軍の同島終了で戦闘は終結した。

日本側は戦死1859、捕虜約1000というほぼ全滅の結果となり。僅かに米軍上陸前に航空隊の整備兵と飛行兵が潜水艦で脱出できただけであった。

しかし、米軍も戦死2105、負傷978、戦車、水陸両用車72台という前代未聞の被害を負った。

このような結果となったのは、米軍が日本の土木技術を過小評価し地下陣地の建設に気づかなかった為であった。

実は同島は栗林忠道少将の提案の下、地下陣地の実験島となっていたのだ。タラワ守備隊は数回にわたり、地下陣地の有用性を解いた電報を打った。

後に、栗林少将の地下陣地建設案は各諸島で採用されることとなる。

おまけ

試製96艦戦改11型

全長7.6m 全幅11m 速力49.5km 航続力1100km
武装 12.7mm機関銃2基 発動機 栄10型 910馬力
引き込み脚採用 発動機換装 全面風防採用

羅門祐人先生の独立愚連艦隊に登場

米軍反攻開始（後書き）

タラワで地下陣地建設が可能となったのは、オーストラリアから多数の建設重機が入ったという設定に基づいています。

キスカ・アッツ撤退

昭和18年9月。米軍の中部太平洋での攻勢が活発化した頃、北の海でも大きな動きがあった。アリューシャン列島方面でも米軍の動きが活発化したのだ。

この時期、日本はセイロン島占領作戦の陽動として発動した作戦で、キスカ・アッツ両島を占領していた。

この2島に駐屯する兵士は総数合わせても2000名程で、あくまで米軍の千島方面への侵攻を牽制する程度の役割しか果たしていなかった

しかし、7月頃から同島に対する米艦艇の艦砲射撃や、空軍による空襲が激しくなった。

大本営は米軍の航空基地化を懸念し、当初は二島への兵力増派を画策した。だが、気象報告から航空基地としては適正を欠く事が判明し、また米軍が中部太平洋方面から侵攻を開始したので、これ以上は占領する価値無しと判断され、輸送船団による撤退が開始された。

しかし、米軍がこれを見逃す筈がなく、艦隊を出撃させ妨害を図った。

アッツ島沖では撤退部隊を護衛する第五艦隊と米艦隊とで戦闘が発生した。両軍艦艇が被った打撃はたいしたことはなかったが、この時、撤退部隊の輸送船1隻が巻き添えを喰らって大破し、乗船していた陸軍兵49名が戦死し、98名が負傷した。

このため、続くキス力撤退では、敵の追跡を振り切れ、小回りが効く高速の水雷戦隊が充当された。

司令官は木村昌福少将。海軍兵学校では下位、海軍大学を出ていない、現場だけで生きてきた叩き上げ將軍である。部下からはシヨウフクと呼ばれ、後に数々の武勲をたてることとなる。

彼は徹底的に霧を使った偽装作戦を展開した。途中味方艦艇同士の衝突事故がおきたものの、常に冷静に行動し、見事キス力に到着、守備隊を撤退させている。

艦隊は復路も何事もなく航行し、数日後予定どおり、幌筵島に帰還している。

米軍はこの作戦に気づかず、その後3週間近くも同島に延々と艦砲射撃と空襲を加え、多大な量の弾薬を浪費したうえ、上陸時には同士討ちを犯すこととなる。

おまけ

メルクワット空軍戦闘機GS9

全長7,6m 全幅11m 自重1300kg

速力450km 武装7,7mm機関銃2基

発動機寿二型改 600馬力

実在しない王国が採用した戦闘機。 96艦戦の試験機。

川又千秋先生の飛龍空戦記に登場。

キスカ・アッツ撤退（後書き）

前話からおまけとして、架空戦記小説に登場した機体を紹介しています。

感想お待ちしております。

中部太平洋戦線

昭和18年10月から11月にかけて、米軍はいよいよ中部太平洋方面への攻撃を激化した。しかし、米軍の侵攻も順調とはいかなかった。

オーストラリアから第3国経由で重機を得ていた日本は、その機械力をフルに使って各諸島の基地能力を大幅に強化させ、強力な航空基地を完成させていた。

米軍にとって不幸だったのは、オーストラリアが中立宣言をしたため、現地の基地使用が出来ず、さらにニューギニア方面からの侵攻が事実上不可能になってしまった事であった。これにより、侵攻ルートを限定されたのみならず、潜水艦の行動も制限を受けることとなった。

これらの要素が日本の中部太平洋方面での反撃を容易ならしめていた。

結果、わずか3ヶ月の侵攻作戦で、米軍はタラワに続いてウオツゼ、マエラップ、メジユロ環礁、ミレの占領に成功したものの、軽空母1、護衛空母2、旧式戦艦1を始めとする艦艇36隻と、兵員1万が戦死（輸送船とともに運命を共にした者含む）するという前代未聞の被害を出してしまった。

さらに、正規空母2、新鋭戦艦1、が損傷し3ヶ月の間戦列を離れる事となった。

予定では2月には日本軍の根拠地トラック泊地を空襲する予定だったのが、現状ではとても無理なことになってしまっていた。

この後、米軍はVT信管を艦隊に支給し、約2ヶ月程日本軍を圧

倒するが、日本側がスパイや独逸経由で対抗策を講じると、途端にその神通力を失うこととなる。

最終的に、米軍が昭和19年2月までに占領できたのはヤルットまでであった。

一方の日本は、昭和18年11月に新鋭の大鳳と雲龍の2隻が竣工し、戦列に加わっていた。また、旅順では高千穂級が勢ぞろいし、空母護衛艦として戦列に加わっていた。

これにともない、金剛級戦艦は2隻づつ中華民国南京政府と、大韓帝国政府に無償譲渡されている。

大和型戦艦も3、4番艦（実態は5、6番艦）が戦列に加わり、日本軍は着々と反撃の牙を磨ぎつつあった。

おまけ

帝国陸軍一式重戦車「満州」

自重55t 速力38km 航続力100km

武装71口径88mm砲

装甲最大150mm

秋月達郎先生の帝国の決断に登場。

中部太平洋戦線（後書き）

この中の話では、昭和18年8月15日をもって大韓帝国が成立し、日本留学中であつた李殿下が即位し、再び独立国となっています。

また、大和型は3、4番艦は旅順工廠建設で中止となっているため、5、6番となっています。

金剛型の譲渡は予算面での問題です。

ウエーク島沖海戦 上

昭和19年1月。日本海軍はいよいよ反撃に入った。

米軍がウエーク島占領の気配を見せたからだ。

ウエーク島はこれまで度々空襲を受けていたが、米軍はついに上陸部隊を載せた輸送船団を差し向けたとの情報を、潜水艦から得た。ウエーク島自体は、小さなサンゴ礁の上にある島のため、基地開設する立地条件が高いとは言い難かった。しかし、ハワイ方面への潜水艦基地としてや、米軍への牽制という意味では戦略的価値は高かった。

米艦隊ウエーク島占領の気配ありという連絡を受け、日本機動艦隊はトラック島を出撃した。

空母大鳳を旗艦に、空母3、軽空母4、巡洋戦艦2、重巡4、軽巡4、駆逐艦18からなる第一航空艦隊であった。

これに給油空母3、軽巡2、駆逐艦10からなる補給艦隊が支援に付く。

一方の米艦隊はエセックス級空母2、インデペンデンス級軽空母2、戦艦2、重巡4、軽巡6、駆逐艦24からなる機動艦隊。これに護衛空母4、旧式戦艦2、重巡3、軽巡2、駆逐艦12からなる上陸支援艦隊、護衛空母2、駆逐艦4、護衛駆逐艦12、輸送艦艇40からなるからなる上陸部隊。上陸将兵5000からなる海兵隊からなる部隊であった。

この時点において日本のウエーク島守備隊は海軍陸戦隊100、陸軍兵200の計300名がいるだけであった

この他に飛行場の基地航空隊員が200名、港湾要員が150名

であつた。

人数が少ないのは補給面の考慮からだ。

駐留する航空隊には零戦24、陸偵4、水偵6が配備されていた。もちろん、この程度の航空兵力では米機動部隊には太刀打ちできないが、偵察と基地防衛のみに目的を絞ればなんとかなると思われていた。

1月17日、海戦は始まった。まず、ウエーク島の彩雲偵察機が米艦隊を捕捉した。

この報に伴い、まずウエーク島に停泊していた艦船が退避した。そして、第一機動部隊は現場海域に急行した。後に、ウエーク島沖大海戦と呼ばれる海戦の始まりであつた。

おまけ

銀河鉄道車載戦闘機スペースイグル。

格納庫車両に搭載される銀河鉄道開発の戦闘機。武装はレーザーガン及びミサイル。発進時は垂直発進か、カタパルトからの打ち出し方式。

性能詳細不明。

銀河鉄道物語に登場。

ウエーク島沖海戦 上（後書き）

御意見・感想お待ちしております。

ウエーク島沖海戦 中

ウエーク島沖海戦で先に米艦隊を発見したのは、空母瑞鶴より飛び立った「彩雲」偵察機であつた。その距離凡そ850km。

日本側は直ちに攻撃態勢に入った。この時点では未だ航空機（戦闘機）の航続力の関係でギリギリ攻撃には移れなかったが、それでも敵を先に発見したのは有利に立てる点であつた。

一方の米艦隊はこの偵察機をウエーク島から発進したものと判断した。まさか日本の偵察機が4000kmもの航続力を持っているなど予想できなかったのだ。

ただちに直掩戦闘機を発進させるとともに、ウエーク島に向け120機からなる第一波攻撃隊を発進させた。

日本側はこの間に攻撃隊の発進準備を終え、何とか攻撃隊を発進可能位置、距離800kmまで艦隊を前進させた。

各空母から烈風48、彗星42、天山36機の計126機が発進した。

この攻撃隊発進直後、ウエーク島に敵機が来襲した。

米攻撃隊はなんの妨害もないままウエーク島に殺到した。これは既に航空隊が無駄な戦力損失を避けるため、回避したからであつた。米攻撃隊は滑走路を穴だらけにし、無線施設や格納庫等を破壊しつくすと去つていった。損害は対空砲による2機のみ。完勝である。だが、意気揚々と帰還する彼らはなんと今まさに米艦隊を攻撃しようとしていた日本攻撃隊と鉢合わせしてしまう。しかも、艦隊上空で。

米軍はレーダー誘導を行おうとしたが、この時一部迂回した天山が欺瞞紙を撒いたため、レーダーが利かなくなってしまった。

この後はもう乱戦となった。彗星に撃墜されるアベンジャーがあるかと思えば、S B 2 Cに撃墜される天山も出る。

だが、そういった乱戦の中、1、2機単位で日本攻撃隊は米艦隊を攻撃した。レーダーが真つ白で、おまけに味方収容中で1、2機単位で来るため、米艦隊は有効な反撃が出来なかった。もともと、日本側もかなりの数が魚雷、爆弾を捨てたため、打撃を与えた機は少なかった。

戦果は味方未帰還21に対し撃墜19、撃沈駆逐艦1であった。

これは流れ魚雷を喰らって轟沈したものである。他に空母2、巡洋艦1中破、戦艦1、巡洋艦1小破であった。

おまけ

帝国海軍戦艦土佐

排水量48600t 速力31ノット

武装40cm砲9門

12.7cm砲20門

対空用ロケット砲装備

同型艦薩摩

大西洋派遣艦隊に売却された英ライオン級戦艦の3、4番艦。
安芸一穂先生の旭日旗往くに登場。

ウエーク島沖海戦 中（後書き）

この世界では史実よりも日本の電子技術が進んでいる設定になっています。

ウエーク島沖海戦 下

日本側の第一波攻撃は不発に終わったが、米軍はこれによって日本機動部隊の存在に気づいた。ただちに、各空母から偵察機が発進した。

その結果、この二時間半後に、ついに日本機動部隊を発見した。

一方の日本機動部隊は、米潜水艦の襲撃を受け、空母千歳が沈没するという思わぬ被害を受けた。ただ、この米潜水艦は報告より先に攻撃を行ったため、哨戒機に発見され撃沈されている。そのため、米機動部隊は偵察機の報告を待つしかなかった。

偵察機の報告が来た1時間30分後、米艦隊は日本艦隊への攻撃準備を終えようとしていた。しかし、米軍にとっては不幸、日本側にとっては幸運なことに、そこへ日本の第二派攻撃隊が襲い掛かった。

今まさに魚雷や爆弾を満載して飛び立とうとしていた米攻撃隊は、もはや的でしかなかった。すぐに整備員や機から降りたパイロットが機体を海に投棄し始めた。

最終的にほとんどの空母がこれらの作業に成功したが、1隻だけ、正規空母バンカーヒルのみがこの作業の最中、彗星艦爆の放った500kg爆弾2発を立て続けに喰らい、爆弾に誘爆し、大爆発、炎上した。

この後バンカーヒルの乗員は必死に消火作業につとめたが、結局消火出来ぬまま総員退艦となり、艦は駆逐艦の魚雷で処分された。

この他に防空巡洋艦1が弾薬庫に魚雷を喰らって轟沈。さらに軽空母2隻が飛行甲板に直撃弾を受け航空機の離発着艦不能になった。

沈没艦こそ3隻であつたが、機体の投棄により米軍は艦載機の消耗が激しく、さらに空母の半分に被害を受けた為、ついに作戦中止のやむなしにいたつた。

機動部隊、上陸部隊共に撤退した。

ただこの海戦にはおまけが付いた。

まず米軍は真珠湾入港直前、突然上陸支援部隊の護衛空母セント・ローが爆沈した。待ち構えていた日本の潜水艦による雷撃であつた。続いて、日本軍は引き上げ途中で、再び潜水艦による攻撃を受けた。これによつて、新鋭重巡伊吹が1本喰らい中破している。

最終的にこの海戦は、両軍痛み沢に終わることとなつた。

米軍はウエーク島を攻略できず、日本軍もまた貴重な空母1隻と、さらにウエーク島の航空、潜水艦基地に少なくとも1ヶ月は使用不能の打撃を受けたのであつた。

この後、日米両軍はウエーク島にはほとんど手を加えなくなるのであつた。

おまけ

帝国海軍戦艦紀伊

全長328m 排水量12万t 速力30ノット

武装51cm主砲9門

20cm砲6門

12.7cm砲48門

子竜蛭先生の不沈戦艦紀伊に登場。

本土空襲開始！

昭和19年新春。製鉄業が盛んな北九州工業地帯に突如空襲警報が鳴り響いた。人々は信じられない思いで次々と防空壕に逃げ込んだ。

そして、しばらくすると今までに見たことないような大きな爆撃機が上空に現れた。

これこそ、米軍によるB29日本本土空襲の始まりであった。

この時期、中国国内は3つの派閥に分裂していたが、この内蒋介石率いる重慶国民党政府は連合国よりの政策をとっていた。

日本を襲ったB29はこの蒋介石が秘密裏にアメリカ力に使用権を認めた成都近郊の飛行場から発進したのであった。

この時点において、重慶政府は日本政府とは中立、汪兆銘の南京政府とは統合交渉中であった。しかし、この行為はもちろんこれらを完全に無視する事象であった。

日本が抗議を行った翌日、重慶政府は日本と南京政府に再宣戦布告した。

ちなみに、このB29による初空襲の結果は、出撃86機中15機が引き返し、7機が針路を間違え爆撃に失敗。この機種の爆撃もまだ照準に不慣れであった為、ほとんどが目標の製鉄所を外れた。

一方の日本側は対空砲と迎撃戦闘機で反撃。しかし対空砲は旧式の7.5cm砲しかなく、有効な迎撃は出来なかった。

迎撃戦闘機隊の方はこの時点では旧式化しつつあった屠龍戦闘機15機と、配備されたばかりで排気タービン付きの雷龍12機であった。

雷龍は機体番号キ102と呼ばれた機体で、オーストラリア製の排気タービンを装備していた。最高速度600km。武装は37mm機関砲1門、20mm機関砲2門であった。

この雷龍は屠龍に比べ格段に高空性能が優れた機体で、この時屠龍が撃墜0、撃破3の戦果であったのに対し、雷龍は撃墜5、撃破3という戦果を挙げた。

これには米軍も驚いている。

これが、終戦まで続くこととなる本土防空戦の序章であった。

おまけ

二式双発単座艦上戦闘機

全長10、3m 全幅11、4m 自重2612kg

速度592km 航続力2480km

武装 20mm機銃4基

発動機 栄21型1130馬力2基

川又千秋先生の翼に日の丸に登場。

講和への道

昭和19年3月、欧州方面での戦争の終結が近づいていたこの頃、日本とイギリスの間でまだ小規模ではあるが、講和へ向けての交渉が、スイスジュネーブで始まっていた。

この時期の英国は独逸との大戦で国力を大幅に疲弊しており、独逸との講和後日本と戦うのはさらに国力を疲弊させる忌々しい状況であると言えた。また、すでに植民地を管理する余力もない。そこで、日本のスローガンであるアジア解放を認める方針を日本側に通告した。

もちろん、英国としてはあくまで日本と講和後自分達の手で独立させ、その影響力を残したたいと考えていた。

後に、昭和19年8月に暫定的に結ばれる事となる日英休戦条約では、インドは英国、マレーを日本の手で独立させ、そしてシンガポールは両国の手で独立させ、日本は英国の香港の租借を認めるという線で落ち着くこととなる。

この舞台裏には、チャーチルと講和特使に命じられた吉田茂との間で相当な駆け引きがあったとされている。

一方、米国との講和は、米軍が徹底抗戦の構えを見せた事から、それ相応の打撃を与えない限り無理と考えられていた。

この時期海軍では、米本土攻撃こそ出なかったが、ハワイ真珠湾軍港を再度徹底的に叩くべしという意見が真剣に論じられていた。

米軍は中部太平洋での攻勢を強め、着々と日本に近づいてきていた。日本軍は各所で防戦し、米軍に損害を与えてはいたが、米軍の物量の前には限界があった。さらに、先月からはB29による本土

空襲も始まった。この時点ではこの空襲は九州方面のみであった。しかし、4月に米軍は成都基地に空中給油機を配備し、中国、関西方面へも空襲を開始する事になる。

もしこの状況でマリアナ方面まで米軍が進出したら、それこそ死活問題である。日本軍は中部太平洋戦線を守りきり、なおかつ米軍、いや米国に大打撃を与える戦略が必要であつた。

そんな中、日本軍上層部に衝撃を与える事件が発生した。トラック島空襲である。

おまけ

帝国海軍実験空母「陸奥」

全長 排水量35000t 速力30ノット

武装 12.7cm砲8門

25mm機銃20門

搭載機80機

羅門祐人先生の独立愚連艦隊に登場。

絶対国防圏

昭和19年4月。日本政府はこの月絶対防衛圏を制定した。

それまでも、陸海、そして政府内でこの絶対防衛圏の着想は存在していたが、それぞれが主張する地域は異なっており、これが日本という単位で制定された初の防衛圏であった。

この絶対防衛圏は北は北千島・満州。西はマリアナ諸島、トラックを結ぶ線。南は南方資源地帯。そして東はセロン島と定められていた。

北千島は北海道方面からの敵侵攻を防ぐ上で絶対に手放せない土地であり、また石油や石炭の資源を持ち、重工業の要である満州も含まれた。

南方の資源地帯は良質な航空用燃料を得る上で手放せない。

ただし、オーストラリアは中立国であることから日本の防衛圏には入っていない。

また、セロン島は昭和19年10月にイギリスと単独講和が成立するまで、その後は一気にマレー半島まで後退している。

マリアナ・トラックを結ぶ線が制定されたのは、これらの島々には天然の良港たる環礁や、また長距離爆撃機B29の飛行場建設が可能であり、なおかつ日本本土やフィリピンへの直接爆撃が可能な地域が存在するからであった。

この時制定された第一次絶対防衛圏により、以降の陸海軍の戦略は決められていく。

ただこの時点において、米軍の侵攻までにまだ余裕があると思わ

れていた。この2ヶ月前のウエーク島沖海戦以降、米軍は中部太平洋方面への侵攻を手控えており、依然として最前線はタラワやメジユロ環礁の線で、これらから発進する航空隊と日本軍の航空隊で小競り合いが行われている程度であった。

日本側の計画では、米軍の本格的侵攻開始は6月頃と見られ、そのためトラックの基地強化計画完成予定は10月であった。またマリアナは12月。北千島は11月。フィリピンは1945年1月であった。

その他のクエゼリン等の中部太平洋の島々は航空隊と対空火器の強化のみで、陸上兵力は最低限とされた。

だが、この計画は僅か一月で吹き飛ぶ。

5月。トラック島に米機動部隊が来襲した。

おまけ

中華民国海軍装甲艦福州

全長186m 排水量11700t 速力28ノット

武装28cm砲6門

15cm砲8門

53, 3cm魚雷発射管8門

その他

ヒトラーが蒋介石に売却したヒツパー級。

高貫布士先生の北冥の海戦に登場。

トラック島空襲 上

1944年5月15日。

この日、太平洋のジブラルタルと呼ばれるトラック島は表向きいともと同じ朝を迎えていた。

表向きと言うのは、根拠地隊司令部や、湾内在泊艦艇。そして駐留する基地航空隊にはただならぬ空気が張り詰めていたからだ。

実は、この前日までに、日本側の中部太平洋上の島々が相次いで米長距離爆撃機の猛烈な爆撃にあっていた。それによって、それらの島々では大きな被害が出ていた。米軍は延べにして400機近い重爆に、200機近い長距離戦闘機を動員したのだ。

この爆撃機により、これらの島々の基地機能は完全に麻痺した。

これには大きな意味がある。中部太平洋上の島々の飛行場は機能こそ小さいが、主に対潜哨戒機や偵察機の発信基地となっていたため、これら偵察網に大きな穴が開いてしまったのだ。

もしこの穴について米機動部隊が襲来したら一大事である。

この時、トラック環礁内には、巡洋戦艦高千穂を旗艦とした第6艦隊が投錨しており、またその他艦艇が70近く、また商船など50隻もいた。

そのため、トラック島全域に警戒警報が出され、艦艇は常時緊急出港が可能な体制がとられた。偵察機を総動員しての付近海域の索敵にかかっていた。一部の艦艇に至っては早々に訓練名目で出港して行った。

しかし、この日本側の処置は遅かった。

黎明を待つて発進した偵察機がわずか30分後に米軍機の編隊見ゆと打って未帰還となった。

すでにエンジンは動いていた為、湾内の各艦艇は直ちに動いた。また基地航空隊の零戦や烈風が迎撃にあがった。

そして、偵察機の打電から25分後、米攻撃隊の一番機がトラッ

ク上空に姿を見せた。

この時点で飛び上がっていた戦闘機はおよそ60機。対し米第一波攻撃隊は実に270機であった。

まずこの60機の戦闘機が米攻撃隊を止めようと空戦に入った。トラック島の長い一日が始まった瞬間であった。

おまけ

海上自衛隊多目的哨戒偏向翼機「海鳥」

全長12.1m 全幅13.7m 自重3.7t

速度450km 航続力800km

武装 20mmバルカン砲1基

発動機 T700-1H1-701C 1800馬力2基

かわぐちかいじ先生のジパングに登場。

トラック島空襲 中

トラックに来襲した米軍機は、まず反撃の目を積むべく飛行場への攻撃を開始しようとした。しかし、その前に停泊中の艦船から一斉に対空砲の発射が始まった。

この内、巡洋戦艦高千穂は三式弾を装填した主砲から、最新式の高射装置を持つ16門の10cm高角砲を振りかざして米軍機に挑んだ。

結果不用意に編隊を密集させていた10機のヘルダイヴァーが血祭りに上げられた。

また、この時飛行場側も反撃を開始する。

この時点で防備用火器の設置進捗状況は計画の凡そ50パーセントであったが、それでもボフォース40mm砲を模倣した三式40mm機関砲、ブローニングM2機関銃を模倣した四式12.7mm対空機関銃が少数ながら配備されていた。

これらが一斉に炎を吐き、銃弾を空に送り出す。

春島の対空陣地ではこれらの砲が6機の敵機を撃墜している。

また、戦闘機隊も低空飛行中を襲われる覚悟で次々と飛び上がる。しかし、彼らは実に勇敢に戦った。それはまさに鬼神のごとく戦ったとされている。

実はこの時トラック島にはラバウルから後退してきた歴戦のパイロット達が部隊再編成の為に集まっていた。その中には後に空軍中將になる笹井淳一大尉や、日本最大の撃墜数を誇る岩本徹三少尉など、後の歴史に名を残すパイロットたちもいた。

実際、この時飛び上がった日本戦闘機は最終的に98機と報告されている。（水上戦闘機は除く。）そして撃墜されたのは12機である。これは280機という大編隊と戦ったにしては少ない数である。しかも、そのほとんどは離陸直後の上昇中に落とされているか

ら、パイロット達が如何に奮闘したかわかる。ちなみに、この時の撃墜数は戦闘機だけで79機とされている。

しかし、いくら新型対空砲を備え、歴戦のパイロットが奮戦しようとも、最終的に数で押し切られ、楓島の飛行場が全滅し、その他の飛行場も30パーセントから50パーセントの機能低下を余儀なくされた。だが、艦船への被害は奇跡的にほとんどなかった。

こうして、戦いの第一ラウンドは終了した。

おまけ

帝国海軍艦上攻撃機「屠龍」

全長10,6m 全幅14,9m

速力400km

武装7,7mm機銃2基 爆装800kg又は魚雷1

発動機トハ120空冷1200馬力

林譲治先生の大日本帝国航空隊戦記に登場。

トラック島空襲 下

トラック島に米第二派攻撃隊が襲来したのは、第一波が去った20分後であった。しかし、その時にはほとんどの艦船は機関を始動し、環礁外へ向かいつつあった。加えて、戦闘機隊も次々発進しつつあった。しかも、それは基地部隊のみならず、前日出港していた空母からの増援も含まれていた。

この時トラック島上空に飛び立っていた戦闘機の総数は95機であった。

米軍機は今度は在泊艦艇へ攻撃をしかけてきた。

120隻の艦船は各々回避運動し、対空砲火を撃ちあげる。

しかし、この時米軍機は軍艦へ攻撃を集中した。その結果商船の被害は沈没1、撃破3に留まった。

そのため、戦後艦隊を環礁内に残したのは商船の被害を少なくしたと評価されている。

一方の軍艦の方は対空砲火を撃ったものの、そうそう簡単に敵機の攻撃を止めれるはずがない。特に、環礁から出て行けなかった艦に攻撃が集中した。

結果、軽巡那珂、鹿島が大破し、駆逐艦2隻と海防艦1隻、その他小艦艇7隻が犠牲となった。また撃破された船も21隻に上った。対する米軍は攻撃隊の内71機が撃墜され、12機が帰還後破棄された。

この時点で、米機動部隊司令官フレッチャー少将はその損害数に驚愕し、日本側の反撃を受けない内の撤退を決めた。

こうして、米機動部隊は不十分な戦果のまま、トラック島空襲を切り上げ、撤退にかかった。しかし、戦いは終わっていないかった。

日本側はトラック島から五月雨式に攻撃隊を発進させていた。

また、湾外へ退避した空母雲龍、瑞鶴、翔鶴、給油空母2隻（いずれも訓練のため寄港していた。）より計90機の攻撃隊が発進していた。

米軍にとつての不幸はトラックから帰還する攻撃隊もバラバラに帰ってきたため、五月雨式に来る日本機と見分けがつかなかったことだ。

結果、天山1機が輪陣形中心に突入し、空母ベントンの艦尾に魚雷を命中させ、4軸中3軸のスクリューを破壊した。

陸上攻撃隊の戦果はそれだけであったが、フレッチャーはベントンの護衛の駆逐艦4隻をつけると、後を追うよう命令し先に退避してしまった。結果、ベントンとその護衛艦は、90機の袋叩きにあい、全滅した。

こうして、トラック島空襲は米軍に損害に対しての実りもないまま終わった。

この後、フレッチャーはベントンを見捨てた事から、解任される事となる。

おまけ

帝国陸軍襲撃機P39

性能は史実と同じ。

主に日本と米国が同盟し、日本への供与機として登場。

高貫布士、林先生の共著大日本帝国欧州電撃作戦などに登場。

マリアナへ

昭和19年6月。米軍は東京、名古屋、神戸などへの本土空襲を開始した。

米軍はマリアナ占領までまだまだ時間が掛かると判断し、なんと中国からの直接空襲を開始した。もちろん、航続距離がもたないのは分かりきった事であったが、米軍はそれを空中給油という手段で解決した。

この空中給油機は、主に黄海上で給油を行い引き返す事から、日本側としては打ち落とす手段がなかった。

そのため、本土への直接侵入を止める手立てはなかった。

もっとも、米軍も欧州戦線との兼ね合いから、成都飛行場に配備できたB29は全てあわせても400機程度であった。

これは成都飛行場に補給するには、ヒマラヤ越えの空中輸送しか方法がなく、補給面で大きな制約を受けた事が大きな原因であった。これにより前述の機体数のみならず、爆撃回数も大きく制限を受けた。週に1度爆撃できれば御の字という所であった。

戦略爆撃隊にしてみれば、早くマリアナを占領して欲しい所であったがその願いが終戦まで叶う事はなかった。

一方、攻撃される側の日本でも、この優秀な性能を誇る敵超重爆撃機の対策に四苦八苦していた。

B29はそれまで日本の戦ってきたいかなる爆撃機よりも高いところを飛び、爆弾を積み、そして速力が速かった。

日本側の防空体制は、独逸からの技術輸入である程度高まりつつ

あった。しかし、それでもかなりの面で準備不足があった。とくに、防空戦隊の拡充は急務であった。

この時期、日本本土にある防空用戦闘機は九州から北海道まであわせても1000機程度で、この内B29迎撃可能な戦闘機は300機程度であった。

これは防空用戦闘機の大半は零式戦であったからだ。

そのため、軍上層部は北九州への爆撃開始後、急いで台湾から双発戦闘機や局地戦闘機の部隊を呼び戻している。

双発戦闘機は殆ど屠龍装備部隊で、本土帰還後は順次雷龍に更新しつつあった。

また局地戦闘機部隊は大半が迅雷装備部隊であったが、こちらも排気タービン装備の紫電改への更新を行っている。

これらが整備されていくと、如何にB29といえど長距離飛行は厳しく、日本側の防空体制強化により被害はうなぎのぼりした。

そして、これが米軍のマリアナ侵攻を早める事となる。

おまけ

帝国陸軍輸送潜航艇

全長80m 排水量960t 速力19ノット

武装53cm魚雷発射管4門

20mm機関砲

陸軍が呂35型をベースに建造した潜水艦。輸送型と攻撃型がある。

林譲治先生の興国の楯に登場。

マリアナへ（後書き）

おまけは後日更新します。

マリアナ最終決戦

昭和19年8月、ついに米軍は大きく動いた。

この時期、欧州では和平の気運が高まりつつあった。それによって世論は日本との講和にも傾く可能性があった。

日本から始めた戦争であったものの、米軍は日本軍と互角にはなっても、圧倒した時期はなく、もしかしたら日本有利の条件でも、世論が講和条約締結に賛成するのはありえないことではなくなっていた。

ルーズベルト大統領としては、なんとしても日本との講和では米国有利の条件を作り出したかった。

そのためには日本本土空襲はなんとしても行う必要があった。しかし現状では長距離爆撃のため出撃回数、ならびに機数が大幅に制限され、満足な爆撃は出来ていなかった。やはり、B29の基地としてマリアナを占領することは避けられないことであった。

未だ中部太平洋や日本領南洋諸島の占領は半分にも行っていないが、これらをすべて占領しては1年以上かかってしまう。もはやそんな余裕はない。なんとしても10月までにマリアナを占領し、12月には日本本土空襲を始めたかった。

そこで、米国はまずヨーロッパ戦線から引き抜いたB24重爆撃機とB17改造の空中給油機を占領した中部太平洋の各航空基地に配置した。

その数は実に後方に補充用として用意された分も含めると裕に2000機近い大群となった。

米軍はまずこれらの爆撃機を使って、日本が建設していた中部太平洋上の各航空基地を徹底的に爆撃した。もちろん、日本側の迎撃も激しく、実に1200機近い機体をわずか1ヶ月で磨り潰す結果

となった。だが、この爆撃によって日本側も基地航空隊の機体80機あまり、さらには多数の重機破壊により、爆撃を受けた基地の7割が向こう1ヶ月の作戦能力を失った。そしてそれは米太平洋艦隊司令部の待ちわびた時であった。

昭和19年9月18日、真珠湾を米機動部隊が出撃した。

正規空母7、軽空母6、戦艦6からなる大機動部隊であった。

帝国陸軍97式中戦車北アフリカ仕様

全長5'52m 全幅2'33m 自重15t

速力38km 航続力210km

武装50mm1門

7'72mm機銃1基

発動機空冷ディーゼル170馬力

北アフリカ派遣部隊用。砲は3号戦車のもの。
学研の兵隊元帥欧州戦記に登場。

マリアナ最終決戦2

昭和19年9月23日早朝。マリアナ諸島ではいつもどおりの朝が始まるはずであった。

しかし、この日は違った。電探が突如海上より押し寄せる大編隊の敵影を探知したのだ。

当初、この報告は誤報とされた。この時期、マリアナ近海には複数の哨戒潜水艦が網を張っており、敵機動部隊が近づくなどありえないと思われていたからだ。

だが、敵影は5つの基地用防空電探が探知し、誤報でないことがわかった。

ただちに各基地では対空火器に兵が取り付き、さらに戦闘機が緊急発進した。

この時期、マリアナ・グアムをあわせた各島々には飛行場が築かれており、戦闘機だけで400機、攻撃機を含め1000機近い飛行機がいた。

だが、やはり警報の遅れが生じてしまい、敵機の接近を許すこととなった。

この時来襲した敵機は、総数480機。内戦闘機が実に7割を占め、まさに敵航空戦力殲滅隊といえた。

日本側は最新鋭の烈風に疾風、さらには雷龍や電光と言った夜間戦闘機などを忠実させていたが、それらの内上空に上がったのは3割強であった。

結局、日本側は米軍の攻撃を防ぎきれず、その跳梁を許すこととなった。

米軍機は好き勝手に銃爆撃を行い、地上の航空機や基地施設を破

壊して回った。

この第一次攻撃により、地上にて航空機278機が破壊され、燃料タンクや対空砲などの基地施設の3割がダメージを受け、加えて空中において47機が撃墜された。

対する日本側の戦果は空中戦で41機撃墜、対空砲火が11機を撃墜。その他に帰還後破棄されたもの17機であった。

さらに、この日のうちに米軍は3回の反復攻撃をマリアナ諸島の各航空基地に加え、日本側は合計600機の航空戦力を、飛ばさぬうちに失うという大敗を決してしまった。

一方、マリアナ空襲さるという報告を受け、連合艦隊は最終決戦計画Zを発動させた。これは全航空、艦隊兵力をもってマリアナで敵を邀撃するプランであった。

そして、9月24日日本機動部隊はフィリピンを出撃した。新鋭空母「大鳳」を旗艦とし、空母11、軽空母5、を中心とする日本で唯一の大機動部隊であった。

おまけ

通信省乙型護衛船Z1型

排水量500t 速力18ノット

武装8cm砲2門

25mm機銃4挺

爆雷投射器

漁船改造の護衛艦。

学研の興国の楯に登場。

マリアナ最終決戦3

マリアナに敵襲！！

この情報に接し、大本営は最終作戦計画Zを発動した。
作戦Zマリアナにおける敵との最終決戦を行うプランである。

この作戦発動に伴い、各部隊は動く。

海軍は連合艦隊の稼働戦力のほとんどを投入する。そして、陸軍は航空部隊に出撃命令を出す。

一方、サイパン島にあるマリアナ方面陸軍司令部は、グアム・テナアン・サイパン3島に非常警戒警報を出し、敵上陸に備える。

この時点において、マリアナ方面の総兵力は4万5千。戦車は3式、1式合計280両。これに加えて自走砲150両が配備されていた。

また近海防衛用の潜航艇や魚雷艇も合わせて200隻配備されていた。

住民の疎開も既に済み、敵の航空攻撃による先制こそ許したが、陸上兵力は未だ健在であった。

また海軍も太田実少将指揮の陸戦隊5千に、戦車42両、自走砲24両を保有しており、マリアナの陸上総兵力は約5万、戦車・自走砲は約500両が配備されていることとなった。

もっとも、実際に米軍が上陸すればこの程度の戦力では不足していることがわかることとなる。

このときの米軍の兵力は上陸軍8万、戦車・自走砲1000両という日本軍の二倍近い戦力を揃えていた。米軍が如何にこの作戦を重視したかわかる。

しかも、戦車は最新鋭のシャーマンイージーエイトを要している

から、日本側の3、1式両戦車では性能的にも力不足であった。

つまり、米軍は上陸軍さえ無傷で上陸できれば、力押しでサイパンを占領することが十分に可能であった。

だから、その前の海上での決戦は重要であった。

決戦開始二日目、日本側は早速航空攻撃に出た。マリアナ方面の残存機180機、硫黄島からの攻撃機80機であった。

この日本側の第一回目の反撃は、敵戦闘機と対空砲火の厚い壁に阻まれ、戦果は巡洋艦1大破と戦闘機の撃墜24機にとどまり、逆に被撃墜71という大火傷を負ってしまう。

その後も散発的に攻撃は繰り返されたが、戦果はあまり上がらなかった。

ついに日本軍も戦力が不足したという楽観的ムードが米軍を支配していった。

マリアナ最終決戦 4

米軍がマリアナへの攻撃を始めて三日目、ついに上陸作戦がスタートした。

8 隻の戦艦の艦砲射撃。さらには護衛空母から絶え間なく飛来する艦載機。さらには中部太平洋の基地から出撃したB29も空襲に参加した。

この爆撃によって海岸線の陣地は徹底的に叩かれ、大打撃を受けた。

しかし、日本軍は既に内陸部に避退しており、実際の打撃は少なかった。

一方、海上ではついに日本連合艦隊の反撃の火蓋がきつて落とされた。

本土より南下した本土防衛艦隊の空母から発進した攻撃隊150が、電波妨害などを実施のうえ攻撃。軽空母サイパンを撃沈し、空母エンタープライズ2を中破させた。

米軍は日本機動部隊はフィリピンにいますかと思ひ込んでいたため、これは完全な奇襲となつてしまった。

一方、米軍も偵察機によって本土防衛艦隊を発見し、直ちに210機からなる第一波、つづいて120からなる第二派攻撃隊を発進させ、2時間に及ぶ波状攻撃の上、空母赤城、蒼龍を含む7隻を撃沈させ、巡洋艦青葉を含む5隻が打撃を受けた。こうして米軍は見事敵をとる形となった。

しかし、勝利に沸く米機動部隊に冷や水が浴びせられた。ついに本命の日本機動部隊が攻撃隊を発進させたのだ。

その数270機。

ちょうど薄暮の、しかも米攻撃隊の収容中になってしまったため、大乱戦となった。

しかし、次第に日本側が押し出した。

日本軍はこの日ために、最新鋭の排気タービン付きの烈風32型、流星22型を配備しており、それらは性能で米軍機に勝っていた。

さらに、硫黄島から出撃した援護部隊により、アンチVT信管兵器やチャフが多用され、米軍艦艇の対空砲火の有効度を大きく低下させた。

結果、空母ホーネット2、サラトガ2、軽空母バターンを含む9隻が沈没。戦艦アイオワを含む10隻が大きな損傷を受け、さらに直援機や攻撃隊の内の200機あまりが失われた。

もともと、日本側も大きな代償を払った。

夜間帰還になったため、行方不明ならびに事故機が続出。実に140機を失う結果となった。

こうして、海戦1日目は終了した。

マリアナ最終決戦4（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

マリアナ最終決戦5

マリアナ決戦4日目。両軍機動部隊は朝からそれぞれ偵察機を飛ばしてお互いの位置を把握しようとしていた。

この索敵においては、高速偵察機彩雲を要する日本側に軍配があり、米軍より30分早く見つけた。

機動部隊司令長官の山口中将は出せるだけの攻撃機、360機を発艦させた。

一方の米軍も20分遅れで330機の攻撃隊を発艦させた。

結果は・・・日本側がやや有利に終わった。

米軍側は前日の攻撃で護衛艦艇に穴が開いてしまっていたのと、戦闘機が不足し始めていたため、日本側の攻撃を許した。

米軍は沈没こそ軽空母プリンストンのみであったが、他に正規空母3、軽空母2が空母としての能力を紛失し、要修理状態となってしまった。これは空母群が壊滅したに等しい打撃であった。

一方、受けてた立った日本側も飛鷹沈没、瑞鶴、翔鶴大破という無視できない損失を負い、加えて航空機も稼動4割となったため、撤退せざるえなかった。

米軍側は日本機動部隊撤退を知ると狂喜した。

確かに彼らの高速空母群は半分の空母に打撃を追ったが、しかし護衛空母は無事なので、上陸部隊の支援は続行できる。また残存する高速空母にもハワイから護衛空母に搭載機の補充用機さい載せて

出してもらいさいすればよかった。

だが、そんな彼らの喜びは長くは続かなかった。

まず最初に、上陸部隊の護衛艦隊から、日本の潜水艦と航空攻撃により大打撃を被ったという報告が舞い込んだ。

これは硫黄島などから発進した陸海軍攻撃隊400機の仕業であった。

これによつて護衛艦隊の、特に護衛空母の3分の2を失つてしまい、有効な航空支援が不可能となった。また、それに合わせて、第6艦隊が派遣した伊・呂・波号潜水艦計50隻に加え、マリアナ配備の潜航艇で、空襲を逃れた残存60隻の攻撃も行われ、輸送船団も致命傷に近い打撃を負った。

そして、とどめとなつたのは、この一電文であつた。

「真珠湾、空襲を受く。」

最終攻撃

真珠湾を襲ったのは、日本が誇る潜水空母艦隊と、鹵獲艦を中心に編成された第七艦隊であった。

潜水空母艦隊は、伊12型3隻と伊400型1隻からなる計4隻、航空機9機の部隊であった。

潜水空母は当初、パナマ運河攻撃用に建造されていたが、搭載機の機数が少ないことと、巨大になり性能維持が難しいことから、一時は建造中止寸前まで追い込まれた。

しかし、ここで設計者側はある策に打って出た。

それは航空機用格納庫を短時間の改装で、陸戦隊、また陸軍部隊の兵員輸送室として使えるようにしたのである。

これによって、陸軍と陸戦隊の支援を受けることが可能となり、なんとか6隻建造分の予算を獲得した。

そして試験的に当初計画より一回り小さい伊12型が起工され、その後、伊400型が建造された。

その内完成した4隻がハワイを襲った。

9機の晴嵐は、夜間低空飛行という超難易度の高い飛行で真珠湾の燃料タンク、そして太平洋艦隊司令部を襲い、燃料タンク9基を破壊し、さらに停泊中だった潜水艦1隻を撃沈している。ただ、太平洋艦隊司令部攻撃は失敗した。

晴嵐9機のうち2機は未帰還となったが、残りの7機は母艦に帰還。機は放棄されたが、搭乗員は救助された。

また、帰還時攻撃隊はわざとレーダーに引っかかるように飛行し、レーダーの目を引き付けた。米軍はこれに引っかかり、偵察の目網に穴ができ、第七艦隊の接近を許した。

そして早朝、4隻の空母から発進した攻撃隊187機の攻撃隊が真珠湾に殺到した。

この約30分前、ウエーク島から発進した2式大艇がアルミチャフを巻き米戦闘機を誘引しており、攻撃隊は鬼のいぬまの真珠湾を襲った。

狙いはかつての奇襲時撃ちもらした燃料タンクや港湾施設。とりわけドッグと潜水艦基地施設であった。

結果、残る燃料タンク全てと港湾施設の7割が破壊され、さらに潜水艦8隻と小艦艇5隻が沈没。ここに真珠湾はその軍港機能を紛失した。

講和

マリアナでの痛み分け、そして真珠湾壊滅は米側に大きなショックを与えた。

その中でとりわけ大きかったのはルーズベルト大統領の急死であった。これによって大統領はトルーマンに代わった。彼としては、これ以上戦争を続ける意義はもうなくなっていたのと、このところ急速にその勢力拡大を図る共産主義に脅威を持ったため、スイス経由で日本に講和をもちかけた。

日本にしてみても、もはや経戦能力はなく、潮時であった。

昭和19年10月25日、日米は停戦し、太平洋から戦火が消えた。

講和条約はオーストラリアで行われ、約3ヶ月の緊迫した議論が続いた。

そして、昭和20年2月28日、講和条約調印。翌日施行された。日本は南洋諸島の非武装化、ならびに満州を含む全占領地からの撤退を行い、さらに軍備も大きく削減することとなった。また、満州の門戸開放も行われた。

これは日本にとって相当な譲歩であったが、国力で勝る米軍と戦った結果ならよしとせねばならなかった。

米軍もグアムの非武装化、ならびに軍備の縮小を確約した。そしてアジアの各植民地の独立を承認した。

リメンバー・パールハーバーの敵は取れなかったが、満州などの新しい市場を開拓できることは米側の大きな利益となった。

かくして、3年近くに及んだ太平洋戦争は終わった。

その半年後、日本では海上警察の役割を担う海上保安庁が発足した。その多くの人員、装備は海軍の物であったが、その中に、真っ白に塗られた2隻の平甲板型駆逐艦の姿もあった。

彼女らは、返還の必要なしとされ、日本に残された、そして状態の良かった数少ない幸運の船であった。

激動の時代を見てきた彼女らは、余生を海の平和を守るために送ったのであった。

講和（後書き）

約8ヶ月の連載を終了できるのも皆様のおかげです。今後ともよろしく願います。
ご愛読感謝します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7505a/>

幻艦記 大東亜編

2011年9月16日22時04分発行